姫とナイトとウィザードと　～ナイトの章～

すずはら りん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫とナイトとウィザードと　～ナイトの章～

【Ｎコード】
Ｎ２２３６Ｘ

【作者名】
すずはら　りん

【あらすじ】
「道はもうとっくに決めていた。だから後は、走り抜くだけだ」
――いつもは何事もない部活の帰り道、井澄は信じがたいものを見た。狼のようでありながら、後ろ足二本で立ち、自分の倍以上大きな黒い獣。そして、ファンタジーな杖を手にした少女。この遭遇が、これまで想像もしなかった世界へと井澄が足を踏み入れるきっかけだった。◆『姫とナイトとウィザードと　～ウィザードの章～』続編です。◆【注意】登場するキャラクターが某漫画のキャラクターに似ていたりします。特にメインでない子たちに顕著

かと…。インスピレーション受けたと言えば聞こえはいいがようするに参考にした結果似すぎてしまったという情けないオチ。なのでそういうのがいやな人は読まないほうがいいと思います。

蠢く闇

月も星もその輝きを見せないような夜の中。時折強く吹く冷えた風に草木が揺れ、風の音に混じって乾いた音をたてる。

そこは都会とは言えず、かといって田舎とも言えない町だ。どちらか答えなければならないとすれば田舎が選択されるだろうほどに、静かで光が少ない。そんな町の中、一戸建ての住居用家屋が立ち並ぶ住宅街の隅には公園がある。ブランコやすべり台などといった公園としては定番の遊具が設置されており、日が落ちるまでは近所に住む子供たちの姿と声で賑わうような公園だ。しかし、夜の十時ともなれば公園で遊ぶ子供は存在しないし、冷たい外気にさらされるこの場所で夜を明かそうなどという強者もいない。

しかし、そこに蠢くものがあった。

――ぐちゃり。

なにかが潰れる音がした。

その音をたてただろう影は、標準的な成人男性の三倍はなくとも二倍の大きさはある。それはまさしく影のように……いや、闇そのもののように、輪郭さえもが灯りの少ない夜の中に溶けてしまっている。

大きな影が、腕と呼べそうな部位を動かした。その手で、鋭く尖った指先で摘むようにして目の前にあったものを持ち上げる。

大きな影にとって、《それ》は玩具であり、また獲物であった。

摘み上げたことにより、慣性の法則にしたがって《それ》はぶらぶらと重そうに揺れた。それが面白いのか、大きな影は遊ぶようにわざと前後左右に揺らし出した。

「うぅ……あ、ぐ……」

揺れる《それ》が声を上げた。痛そうに、苦しそうに、低く、掠れた音で呻く。けれど大きな影は《それ》が声を上げたことなど気にしていない様子で遊び続けた。
やがて、大きな影は《それ》を地面へと無造作に落とした。どさり、と重く痛そうな音が他に誰もない公園に響き、それとほぼ同時に「がっ」と《それ》から音が漏れた。それは痛みを訴える声だった。しかし、大きな影はやはりそれには一切頓着しない。揺らして遊ぶのに飽きたから手を離した、それだけの行動だった。
そして、大きな影は無造作に《それ》の上に乗り上げた。

「ぐっ……ご、ふっ……、……っ！」

めり、と決して心地よくないはずの音が地を這い、《それ》の体が地面へとめり込む。もしかしたら大きな声で叫びを上げたい心境だったかもしれないが、そうなった時にはもうすでに叫ぶことなど不可能な状態に追いやられていた。《それ》はもう、はくはくと苦しそうに、空気を求めるように口を動かしながら、その端からどろりとした液体を吐き出すことしかできなかった。
大きな影は《それ》の端っこを指先で摘み、そして、思い切り引っ張った。

「っ……！！」

もう声さえ出さなかった。口から漏れたのは押し出された空気だけだった。《それ》は口と目を大きく開き、あちこちからどろりとした液体を流して、体を弛緩させた。
大きな影はびちゃびちゃと液体が滴る手元のものを、大きく大きく開いた口の中に放り込んみ、
――その直後、ぐらりとその巨体を傾かせた。

どしん、ともう動かない《それ》よりもずっと重そうな音を立て、大きな影は地面へと倒れ伏した。その頭には、冷たい輝きを放つ大きな氷柱のようなものが何本も突き刺さっていた。倒れた大きな影は、そのままぴくりとも動かなくなった。

キィ、と金属質な、ともすれば耳を塞いでしまいたくなるような高い音が鳴った。それは自転車のブレーキの音だった。公園のすぐ傍に止まったその自転車の持ち主は、自転車のスタンドを立てることもせずにそれを放り出し、公園の中に飛び込んだ。数秒遅れてがちゃん、と倒れる音がしたが、持ち主が気にする様子はなかった。

自転車の持ち主は息を弾ませた状態のまま、その場に立って周囲を見回した。倒れている大きな影を見て、そのすぐ傍に放られている残骸を見た。反射的に口元を手で覆う。

その状態を一言で表現するならば「凄惨」という言葉がぴったりだった。

目は大きく開かれたままぴくりとも動かない。ぎょろついているその瞳はすでに濁り切っている。自転車の持ち主を見ているようでいて、その実そこにはもうなにも映ってはいない。

口はだらしなく開かれたまま、これもやはりぴくりとも動かない。そこからはだらだらと黒いものが流れ落ちている。光を当てれば赤色として認識できるだろう。

右の腕は、存在しなかった。右の肩から曲線を描くようにパーツが欠け落ちており、衣服は黒く染まっていた。これも、口から流れているもの同様、光を当てればやはり赤いのだろう。

胸から腹にかけては、地面にめり込む形でひしゃげていた。背骨はいくつかの骨を繋ぎ合わせてあるのだからある程度は曲がるものだ。しかし、そんな体の仕組みは意味を持たないかのように、不自然にひしゃげていた。衣服や肉に隠されているが、背骨も肋骨も、目を当てられない状態になっていることだろう。

腹から下は、なかった。

自転車の持ち主は、それを確認すると再度大きな影が倒れていた

はずの場所に視線を向けた。大きな影は消えていた。その名残すらすでに消失していた。代わりと言わんばかりに、そこには腹から足までのパーツが転がっている。
生きたまま引きちぎられたのだろうということは、容易に想像できた。
その光景すべてを確認し終えた自転車の持ち主は、よろけるように数歩後ずさり、握った拳を震わせた。

「……くそ！」

自転車の持ち主は、沈痛で、後悔にまみれた声を吐き出し、右手の中にある長い棒状のものを強く握り締めた。体の震えがそれにまで伝わり、白いそれが闇の中でかすかに揺れる。
自転車の持ち主は、しばらくその場に立ち尽くした。しかし、すでにこの場においてできることはなにもなかった。
数分後、自転車の持ち主はようやくあきらめたようにか細く息を吐き出した。空を仰ぐが、そこには月も星も姿がなく、慰めにも気分転換にもならなかった。
再度、もう二度と瞬くことのない濁った瞳を見る。苦痛と恐怖に染まり、歪み、固まってしまった表情を見る。咽返るような血のにおいが充満する公園の中で、自分の失態を呪うように下唇を噛み、眉間に皺を刻み、目の前の光景を胸の中に、記憶の中に焼き付ける。
間に合わなかった。それは取り返しのつかないことだった。謝罪も懺悔も、どんな言葉もすでに意味はない。理解しているからこそ、目の前の光景から目を背けることはできなかった。
やがて、自転車の持ち主は、救えなかった名前も知らない誰かに向けて合掌し、数秒ほど黙祷を捧げた。
それが終われば、凄惨な様相の亡骸にくるりと背を向け、その場をそのままにして、倒れた自転車を起こし、それに乗って姿を消した。

01　日常

走るのが好きだ。
後方へと流れる風を全身で感じながら、なんとはなしに、しかし強く思う。
ゴールとなるグラウンドの片隅にあるネット群だけを目指し、ひたすら走る。周囲の色も音も遠くなり、ただ走る。
勢いのままネット群の前を滑るように通り過ぎてから徐々に減速し、ようやく息が上がっていることを自覚する。この息苦しさはあまり好きじゃないが、走っている瞬間の爽快さはなににも代えられない。いつもは思わず顔をしかめるような冷たい空気も、今は火照った体に心地よく感じる。汗をかいたから、このままでいたら風邪ひきそうだけど。
足を止め、空を見上げる。薄い灰色の雲が空を覆い隠していて、爽快さ半減だ。見るんじゃなかった。

「お疲れさま、井澄くん。はい、タオル。はやく汗拭かないと、風邪引くよ」
「おお、サンキュー高坂」

マネージャーの高坂がタオルを差し出してくれたので、感謝して受け取る。高坂は部員全員が認めるくらい優秀なマネージャーだ。いまだかつて、どのタオルが誰のものなのか、間違えたことがない。こんなこと程度で優秀だと言われても高坂としては微妙だろうが。いや、タオルのことだけじゃなく、対戦校のデータのまとめとか、ほんとすごいんだ。試合ってなると、高坂が作った対策ノートに部員全員が助けられたもんだ。
俺がタオルを受け取って軽く汗を拭き始めると、高坂はすぐに、今俺がやってきた方向へと足を向けた。

「お疲れさま、真嶋くん」
「また井澄がイチバンかー！」

後方から追いついてきたらしい部活仲間の真嶋が悔しそうに声を上げた。俺は真嶋を振り返り、にやりと笑ってやった。

「そー簡単に抜かされちゃ、元陸上部の名折れだからな」
「ちぇー」

真嶋もまた、軽い調子で「サンキュ」と言いながら高坂からタオルを受け取り、汗を拭く。その後方から白い息を吐き出しながらこっちに向かってくるもう一人の姿が見える。

「お疲れ御端ー」
「お、おつか、れっ……二人とも、速い、ね……！」
「御端も十分はえーよ。ま、俺や井澄ほどじゃねーけどさ！」
「う、うん！」

どもる癖がある御端も、真嶋同様部活仲間だ。
俺と、真嶋と、御端。三人ともクラスは一年九組。つまりクラスメートってわけだ。部内で足の速さトップ３（ついでに身長もどんぐりの背比べ……これは激しくどうでもいい）が同じクラスってどんな偶然だ、と何ヶ月か前には部員みんなで笑ったものだ。

「お疲れさま、御端くん。はい、タオル」
「あ、あ、ありが、と！」

俺や真嶋同様、やっぱりどもりながら感謝の言葉を告げて高坂からタオルを受け取る御端の横で、俺と真嶋は次の練習メニューの話

題に移る。

「次、柔軟だよな」

「おお」

「御端、一緒にやろーぜ！」

「う、うん！」

「いやいや、待て待て。お前らちょっとは学習しろ。間壁が怒るだろーが」

飛びつかんばかりの勢いで御端に対して身を乗り出す真嶋の襟首を掴んで引っ張る。「御端も元気よく頷くんじゃない」と言ってやりたい。言ってやったところで真意は伝わらないだろうけどな。

間壁は短気かつ無駄に心配性で、御端のことによく口を挟む。その大半が心配による行動の制限であり、特に真嶋と一緒だとその傾向が顕著だ。別に真嶋と一緒にいるなってわけじゃなくて、単に真嶋に引っ張られて御端まで無茶して怪我したりしないかとひやひやしているわけだ。また、御端も基本的に間壁に口答えしないもんだから、間壁の口出しはエスカレートしがちになる。

まあな、間壁の気持ちもわからなくもないよ。真嶋はすっげーアクティブでゴーイングマイウェイだし、部内一の元気っ子かつやんちゃっ子だ。俺だって、真嶋と御端が一緒にいると危なっかしくは思う。けど、どう考えても間壁は心配しすぎだ。真嶋だって御端だって、それぞれそれなりにちゃんと考えてんだから。三度のメシと同じくらい好きな野球ができなくなる状況に、誰が自分から飛び込んでいくよ。いくら間壁がキャッチャーで御端がピッチャーだからって、うざいにもほどがあるだろ。

真嶋が面白くなさそうな顔をする。

「いーじゃねーか別にー」

「俺に言うなよ、間壁に言え」

「う、え、えっと……？」

……まあ、加えて御端が若干天然っぽいのも、間壁の心配性に拍車かけてる気もしなくはない。そういう点では俺もたしかに心配だ。詐欺とかの被害にあいそうで。

「んじゃ井澄が御端と組めよ。だったら間壁も文句言わないだろーしさ！」

「は？」

いや、別に俺じゃなくてむしろ間壁と組ませてやったら安心だと思うんだけど。間壁が。

言い返す前に真嶋はくるりと方向転換。

「てーらっもとー！　柔軟しよーぜー！」

「あー！？　ったく、元気だな真嶋は……」

「じゅうなーん！」

「わーった、わーった！　けどもうちょっと休ませろ！」

「寺本ナンジャクだなー」

「お前の元気さが異常なんだよ！」

続々とゴールに到着する部員たちの中から我らがキャプテン・寺本を選び出し（これはおそらく、単に一番近い位置にいたからだ）、駆け寄っていく真嶋。

寺本の声に心の中でだけ同意を返して、俺とともに取り残された御端を見る。御端は困った顔をして寺本にじゃれついている真嶋を見ている。次いで、間壁の姿を探す。すでにゴールにはたどり着いているが、今目の前でタオルの受け渡しが行われているところだ。見たところ、呼吸が落ち着くまでもうしばらくかかりそうな感じだ。

十一月中旬。冬の足音が聞こえてきそうな秋。すでに乾いた冷気

が充満している。ランニングのために汗もかいている。いくら鍛えていると言っても、このまま突っ立ってたら風邪を引くだろう。
……ま、いっか。間壁だって、御端が風邪引くのは不本意だろうし。
ほとんど汗を拭けてない御端に目を向けて、言う。
「とりあえず、ちゃんと汗拭けよ。そんで柔軟しようぜ」
「う、うん。……あの、い、井澄、くん」
「ん？」
「よ、よろしく、お願いします……」
馬鹿丁寧に頭を下げられた。こんなこと程度で、と部内短気代表の間壁なんかはイラっとくるんだろう。俺は、もう御端のそういう行動にも慣れてて、そういうのが御端だって思ってるから、「おー」と軽く返した。

＊　＊　＊

俺が所属する北上里高校野球部は、今年新設のできたてほやほや野球部だ。正確には、何年か前に一度廃部になったのが復活したらしい。
部員は全員一年生。過去の経験や積み重ねという実績は一切ないし、普通の公立高校だから特に野球が上手いやつが集まるわけでもなく、新設なもんだから人数も少ない。部員十一人、うち一人はマネージャー。プレーヤーは十人。正直、かなり、ギリギリだ。
と、まあ、マイナス面はたしかにあるけど、俺は現状を悲観してはいない。というか、むしろ楽しくてたまらないくらいだ。
俺が野球をするようになったのは、実は中学二年生になってから

だった。それまでは陸上部の所属だった。単純に走るのが好きだったからだ。

走るのが好きだ。周囲を置き去りにするように駆け抜ける爽快感がたまらない。けれど、陸上はひとりきりだ。部活仲間はそれなりに仲が良かったが、コースに立てばみんなひとりだった。自分ひとりの力で駆け抜けなければならなかった。それを不満に思ったことはなかったけど、少しさみしいとは思っていた。

ところがある日、野球部に所属するクラスメートから練習試合の助っ人を頼まれ、それを引き受けて以来、俺の日常は一変した。

野球はみんなで勝ち抜くスポーツだ。バットを振りぬき、ボールにぶつけ、塁に出る。ここまでは特になんとも思わなかった。しかし、ホームに戻った瞬間、本来の部員でもない俺を嬉しそうな笑顔で歓迎した野球部の連中に、「いいなあ」と思わされた。

誰かが上手いことやれば我がことのように喜び、誰かが失敗すれば背中を叩いて強く励ます。そういう触れ合いが、「いいなあ」と思った。

それだけと言えば、それだけだ。けど、この「いいなあ」が原動力になり、俺は陸上をやめて、野球に打ち込むようになった。

別に、メジャーなとこで言えばサッカーだってチーム戦だし、そっちも嫌いじゃないんだけどな。どうも俺は、ボールを蹴るよりバットを握って振るほうが好きらしい。

幸い、元々運動神経はいいほうだし、動体視力もそれなりによかったからか、すぐ試合に出れるようになった。もっとも、そんなに強い部じゃなかったけどな。

基本的に体を動かすのが好きだから練習もそんなに嫌いじゃなかったけど、試合のほうが部活仲間との絆みたいなものを感じられた。そういう経験をして、ますます野球にはまっていった、というわけだ。

高校は、行けそうなら公立に行ってくれとおふくろに言われて、特に野球部の強さとか考えないで、通いやすそうな立地かつ自分の

成績で行けそうなところ、という理由で北上里高校を選んだ。最初は、野球部がないってことでどうするか悩んだんだけど、下見の時に偶然にも野球部の顧問をする予定だという先生に会うことができ、ただの一候補から第一志望校になったのだ。ちなみに、なぜ公立なのかと言えば、兄貴が私立の大学に行ってしまったからだ。学費が高いんだと。

顧問になる先生の雰囲気はいい感じだったが、部そのものの雰囲気がわからない点で結構な賭けだったと思う。

しかし、大当たりだった、と入学して半年以上経過した今の俺は思っている。

まあ、人数が少ないって点はどうしようもなくデメリットだ。二人負傷したら、その時点で試合ができなくなってしまうというリスクがある。しかし、先輩がいない分みんなのびのびとプレイできるし、人数が少ないからこそ部員の絆は他校の野球部より強固なものになっている。少なくとも、俺はそう感じている。そういうところが、結構気に入っていたりする。

「うー、さっみぃ！」
「言うなよ、余計寒くなる」
「コ、コンビニ、寄る？」
「だな！　肉まん食いてー！」
「お、おれ、あんまん……」
「んじゃ、俺はピザまーん」

練習を終え、御端や真嶋と並んで自転車を押しながら歩く。自転車に乗ったほうが速いのは速いが、走るほど運動にはならない自転車で風を切っていくには、風が冷たすぎる。

吐き出される息はもう一週間ほど前から白くなってきている。そういうのを見ていると、もうすぐ冬だなあ、としみじみ思う。

空を見上げても、正しく空は見えない。どんよりと重たそうな雲

が空を隠している。月の位置も、光のおかげでおぼろげにわかる程度だ。星なんてまったく見えない。
エネルギーが足りないと嘆く体をコンビニに向け、三人それぞれ宣言どおりのものをささっと購入し、コンビニの脇で早速それにかぶりつく。ほっかほっかの湯気を上空へと放つそれは想像以上に熱くて、三人して「あっちぃ！」と笑う。けれど、その熱もすぐ外気によって冷めていき、食べやすい程度の温度へと変わっていった。
部活後の買い食い、寒い日のピザまんは最高だな。や、肉まんもあんまんも好きだけどな。今日はピザまんだから。そんな気分だったんだよ。
ほふほふとあったかいそれを食ってたら、なんか胸がほかほかしてきた。何気ない瞬間だけど、こういうとき、なんか無性に「幸せだなー」と思う。以前、真嶋や御端にぽろっとそんなことをこぼしたら、馬鹿にされるかとも思ったけど二人は「俺もだ」と笑って同意を返してきた。そのときも、「幸せだなー」って思った。
なんでもない日常ってのが、一番《幸せ》なのかもしれねーな。

02　非日常

「まだ七時かー」
「つ、つまんない、ね」

真嶋が携帯電話で時間を確認してつまらなそうな声を上げ、御端も真嶋よりは控えめな声量でそれに乗る。その後に、俺も小さく「だな」と続けた。

なんつーか、力が余ってる感じだ。長いことそんな余裕は感じていなかったもんだから、余計に違和感が強い。

我が北上里高校野球部の顧問である小林先生、通称コバセンは、野球のプレイ経験はない。

まったくの素人。だから、俺たちの練習メニューを組み上げるのは、水木監督の仕事だ。監督は女なんだけど、野球大好きで……いろいろとすごくってだな。北上里高校の卒業生で、コバセンの元教え子、かつて存在した旧野球部の部員でもあったらしい。で、詳しくはわからないが、コバセンと一緒になって野球部復興を実行したわけだ。

監督が組む練習メニューは、結構鬼だった。朝練の開始は電車通学の部員が始発電車で学校にたどり着く頃に。放課後の練習は下手をすると解散が八時半を過ぎるという、恐ろしいスケジュールをこの夏に組んだのだ。中学時代じゃありえなかったハードさ。さすがに毎日じゃなかったけどな。毎週木曜日はミーティングのみで終わるように設定されて、それは今も継続中だ。休息日、ということだ。

そんな感じで、部活にとっぷり浸かっていた少し前までの生活を考えると、夜の七時、正確には七時十五分にこうしてコンビニの前に立っていることがたまらなく不思議に思える。そして、あのスパルタメニューに慣れてきていた身としては、少々物足りなさを感じてしまう。あんだけきつかったのになー。最初の頃なんて、寝ないで家に帰るのがやっとだったってのに。人間は順応する生き物なん

だってつくづく思う。
今日の解散は六時五十分ぐらいだった。
秋季大会の地区予選準々決勝で惜しくも敗退という結果になり、その時点で今年の大会日程が終了している。その後は練習試合をいくつかこなし、徐々に体作りをメインに据えた練習メニューにシフトしていき、今じゃすっかりシーズンオフ仕様だ。
けど、終了時刻がこうまで早くなっているのは、そのせいだけじゃない。

「アレさ、結局どうなったんだろうな。犯人とかわかったんかな」
「昨日の今日でそこまで進展ある可能性はすっげー低いと思うぞ」
「それもそっか……」

真嶋の問いに対する俺の回答は、我ながらため息が出るような内容だった。
真嶋が言う「アレ」っていうのは、昨日のトップニュースである猟奇殺人事件のことだ。もっとも、俺らがそのニュースを知ったのは今日の午前中だったんだけど。
繰り返すが、それは昨日のトップニュースだった。ローカルチャンネルのニュース番組も新聞も、この話題で持ちきりになっている。……らしい。ニュース番組も新聞も滅多に見ない俺は、今朝の朝食の席でおふくろにその話を持ち出されて、「ふぅん」と簡潔な……簡潔すぎる感想を抱いた。……もう感想ですらねーなこれ。
新聞もニュースも確認していないが、おふくろが言うには、最寄駅である北上里駅より西方向三駅ほど向こうの地域で、死体が発見されたらしい。それだけならよくある……なんて、あまり言いたくはないけど、あっちでもこっちでも報道されているような殺人事件とあまり変わらないだろう。もちろん小さな扱いはできないだろうが、こう言っちゃなんだけど、自分に直接関係ないことなら冷めた目で見れるやつの多いこの時代、ただどっかの誰かが殺されたって

だけなら、あっちでもこっちでも話題にのぼるようなことじゃない。
この事件がトップニュースと言ってしまえるほど取り沙汰されている理由は、発見された死体の状態だ。
とは言っても、その詳細な情報は、実は知らなかったりする。なんせ朝飯を食ってる最中のことだったもんで、おふくろはその辺りの情報を濁していたからな。
けど、学校じゃ誰も彼もが遠慮なくその話を繰り広げ、その内容は遠慮なく俺の耳にも入ってきた。まあ、どこまで信憑性を評価できるかはわからないけどな。頭がなかっただの、腕がなかっただのと、この辺りは証言がまちまちだったが、クラスメートたちが口にした情報の中で上半身と下半身が別物になっていたという部分だけは一致していた。これがまた、刃物や機器で切断されたのではく、力任せに引きちぎったような状態だとか。
どんなだよ、と思って想像しかけて、吐き気が胃の奥から這い上がりかけてきたので大人しく中断した。その傍らで神経がど図太い真嶋が「なんかすげーなー」なんて呟いてて、御端があんまり理解してない様子で首を傾げていた。この瞬間、二人のことが心底うらやましくなったのは余談だ。
まあ、こいつらが余裕をもって構えていられたのも、放課後の練習が開始するまでだったけどな。コバセンと監督から、放課後の練習をしばらく早めに切り上げると宣言された途端、真嶋と御端は顔色を変えたのだ。
最寄り駅より三駅分離れているとはいえ、現場が市内だってことに違いはない。犯人の正体も目的もわかってない状態で、遅くまで生徒を学校に拘束することは躊躇われたのだろう。他の運動部も早々に活動を切り上げていたから、学校側からお達しがあった可能性も高い。妥当な決定だ。
……まあ、ギリギリ七時前解散で効果があるのかは、正直よくわかんねーけどな。だって、もう真っ暗だし。しかも部活後の寄り道は俺らにとってデフォルトだし。

とにかくだ。この猟奇殺人事件がどっかのポイントで一段落してくれない限り、俺たちの練習時間は通常より短い状態の維持を余儀なくされる。だから、真嶋が解決したかどうかを気にかけるのは当然だし、俺だってとっとと解決してほしい。練習のことを差し引いても、猟奇殺人事件なんてのは、その響きだけで気味が悪い。

とはいえ、死体が発見されたのは昨日の昼前のこと。今朝の時点ではまだ被害者の身元も確認できていなかったのだ。解決は遠いだろう。

自然にため息がこぼれる。だからと言って、ここで俺たちがこんな話をしていたところで、解決には結びつかない。気分を切り替えるため空を見上げるが、残念ながら星や月は見えない。余計に気が重くなった気がしなくもないが、だからと言ってどうすることもできない。首の角度を元に戻して、真嶋と御端を見る。

「ま、俺らがぐだぐだ言ってたってしょーがねーよ。練習時間が減るのは微妙だけど、相当ひどい状態だったみてーだしな。しかも場所は市内。となれば、学校側が運動部の活動時間短くするのも当然の判断だろ」

「そーだけどさー……」

いまだ不満そうな真嶋の向こうで、あんまんを食い終わったらしい御端が、すぐそこにあるごみ箱にあんまんを包んでいた紙を放り込み、それから西のほうを向いて、両手の指を組んで目を閉じた。

「御端？　なにしてんだ？」

「え、え、っと……おいのり……」

「あ、そっか。そだよな」

「……悪い御端、もーちょっと詳しく頼む」

納得顔して頷く真嶋にはちろりとだけ視線をやって、御端に続き

を促す。
御端は全体的に言葉が足りない。足りないままで完璧に理解できちまうのは、部内でもクラス内でも真嶋だけだ。なんで真嶋はわかるのか、一度部員一同で真剣に考えてみたことがあったけど、結局のところ「真嶋だからな」で片付いてしまった。

「し、死んだ、ひとが……つぎ、生まれて、きて、幸せになれるように、お祈りするんだ、って……おばあちゃん、が」
「……ああ。なるほど」

つまり、御端は、先ほど俺と真嶋で話していた猟奇殺人事件の被害者の冥福と来世の幸福をお祈りしていたわけだ。ここまで言葉が出てくれれば俺にもわかる。
真嶋がごみ箱に近づき、俺もそれに続く。

「俺もしよーっと！」
「俺も」
「い、いっしょ、に！」
「おお、一緒一緒」

真嶋に続いてごみを捨ててから、ちょっと興奮気味の御端に頷いてやれば、御端はものすごく嬉しそうに笑った。
御端は全体的に色素が薄い。特に髪の毛の色素が標準日本人より薄い。肌の色も俺たちよりずっと白いし、瞳の色もよく見れば茶に緑色が薄っすら混じっている。それが原因で、昔からあまり仲のいい友達ができなかったらしい。中学時代には、運の悪いことに非常に意地の悪いやつと同じクラスになったがために、イジメの標的になったこともあったとか。詳しく聞いたわけじゃないけど。だからか、誰かとなにかを一緒にするということを、とても大切にするところがある。俺や真嶋にとっては何気ないことでも、御端にとって

はものすごーく大切なことだったりする、らしい。
いい加減慣れればいいのに、と思わなくもない。けど、無理に慣れることはないんじゃないかと思うんだ。何度も何度もこういうことを繰り返していけばそのうち、こういうことも当たり前なんだって、そう思えるようになるだろう。急がせなくたって、いつかその日は来る。だから俺らは、いつもどおりにしてればいい。
御端を急がせたって、どっかで躓くのが目に見えてるしな。
三人並んで、西の方向……被害者が発見されたという町のほうに向かって、手を合わせてしっかり祈った。
来世があるかなんてのはわかんねーけど。
もしそんなのがあるんだったら、次こそはこんな悲惨な死に方じゃなく、普通に、幸せに生きて、終われますように。

03　黒い獣

三人で祈った後も、寒い空の下だっていうのにまったく気にせずくだらない話を繰り広げて、気がつくと八時を十五分ほど過ぎていた。

同じクラスで、同じ部活。一緒にいる時間は家族よりも長いはずなのに、いったいなにをそんなに話すことがあるのかと自分でも思う。でも案外、くだらなくって、記憶にもあんまり残らないような、そういうどうでいい話で盛り上がれちまうもんだろう。実際俺は、ついさっきまで笑って話していた内容の半分くらいは思い出せない状態だ。

真嶋、御端とは、ついさっきそこの十字路で分かれた。

俺だけ違う方向……ってわけじゃないんだな、実は。真嶋の自宅は学校の真裏だから、本当はコンビニに寄るより、裏門から出て自宅に直行したほうが速いんだよ。それでも真嶋は俺らと一緒に正門から出て、コンビニに寄ったりなんかする。それは真嶋なりの友達付き合い、というか、単に一緒のほうが楽しいと思っているからなんだろう。つまらないんなら、自由奔放を地でいくあの真嶋が、俺らと一緒に行動するとは思えないからな。特に御端とは妙に波長が合っているらしく、別行動するほうが珍しいくらいだ。

周りの連中は、同じクラスだからか俺たち三人をワンセットと見なしてくることが多いんだけど、俺からしてみりゃ、本当のワンセットは真嶋と御端で、俺はプラスワンって感じだ。たしかにあいつらと一緒にはいるけど、保護者的ポジションだもんなー、俺。あいつらが羽目はずしすぎないように見てる役。……楽しそうだと思ったら俺も乗っちまうんだけどな。うん、大事にならなきゃいいんだよ、ようするに。

……脱線した。

とにかく、俺は別方向に進む二人を見送って、自転車に跨った。

ここから自宅までは自転車で十五分程度。ずいぶん長話していたけど、それでも家に着くのは昨日より早くなる。しょーがないってのはわかるんだけど、やっぱ違和感あるなぁ。

ふいに、スラックスのポケットに突っ込んであった携帯電話が振動した。それは数秒で途切れたので、電話ではなくメールの着信であることがわかる。

誰からだろうと思いながらコートの裾をどかして携帯電話を取り出し、二つ折りのそれをぱかっと片手で開く。

差出人はおふくろだった。なんだろう、と本文を読む。

『できれば牛乳買ってきて』

その内容に、俺は無言でしばらく悩んでから、短い了承の返事を打ち込んだ。

正直に言えば、面倒くさい。コンビニに戻るには今来た道を戻らなければならないし、近所のスーパーに寄るにしても少し回り道になる。しかし、それでも昨日よりは少し早い時間には家にたどり着ける。一応、市内で猟奇殺人事件なんてものがあったばかりだ。そんな中、おふくろに夜道を一人出歩かせるのはどうしたって気が引ける。

……息子の俺への心配は、とちらっと考えてしまったが、気にしないことにする。いや、ほら、俺は自転車があるし。一応鍛えてる鍛えてるから、万が一猟奇殺人事件の犯人と出くわしても、相手が自動車とかに乗っていなければ逃げ切れる可能性がある。それに対して、おふくろは自分用の自転車なんて持ってないし、運転免許も持っていない。持っていたとしても、我が家に一台きりの自動車は父親が仕事先まで乗っていってまだ帰ってきていないはずなので、どっちにしろ不在だろう。

もうちょっとメールが早ければ、さっきのコンビニで買ったんだけどな。

俺はため息をついて送信ボタンを押し、二つ折りにした携帯電話をスラックスのポケットではなくかばんの前面ポケットに放り込んだ。コートの裾をどけるという動作が邪魔くさかったからだ。あ、コートのポケットに入れてもよかったのか。けど、あったかいポケットの中に手を突っ込んだりしたら出したくなくなりそうだしな。やっぱかばんでいーや。

ポケットのファスナーを閉めてから、スーパーを目指して自転車を漕ぎ出した。頭の中でコンビニに戻って改めて帰路につくパターンとスーパーに寄って帰路につくパターンの所要時間をそれぞれ計算して、スーパーのほうが早いだろうと判断した。と言っても、五分も違わないんだけどな。

閉店時間にはまだ遠く、煌々と明かりを灯しているスーパーに足を踏み入れ、多くもないが少なくもない客の中にまぎれてさっさと牛乳パックを一本購入した。本数についてはメールになかったけど、まあ一本あればとりあえずいいだろう。

ビニール袋に入った牛乳パックとかばんを自転車のかごに放り込み、自転車にまたがって改めて家を目指すことにする。

さて、と。今は何時だ？

携帯電話を引っ張り出して時間を確認すると、デジタル表示で二十時三十八分という情報が表示される。ここからさらに自転車で十分ちょっと。

あくびを一つしてから携帯電話をしまい、ペダルを踏む足に力を入れ、スーパーから離れる。

放課後の練習は短くなったけれど、朝練は相変わらずあるのだ。早いとこメシ食って風呂に入って寝ないと、明日がきつくなるのは目に見えている。練習時間が短くなって物足りない感はあるが、せっかくだから少しでも早く眠って休もう、と前向きに考える。

少しでも時間を短縮しようと、足にさらに力を加えようと、

――した。

車輪が不安定によろけて横転しそうになり、咄嗟に左足を地面に

つけた。そのままの姿勢で、驚きから瞬きを数回繰り返す。
……今、揺れなかったか？
無言であたりを窺う。揺れたような、気がする。けど、揺れらしきものを感じたのはほんの一瞬で、揺れたのだという確信がいまいち持てない。
……俺の気のせいか？
視界に映るのは夜の住宅街。時刻は夜八時半過ぎ。等間隔に路上に配置された街灯が薄明るく周辺を照らし、民家の窓からもほのかな明かりが漏れている。夜特有の静けさの中、騒ぎ立てているような家は一つもない。
……やっぱ気のせいだったかな。
練習時間がいつもより短いとはいえ、その短時間もやっぱしごかれてたわけだから、それなりに疲れてるし。気付かないうちにうとうとしちまってたのかもしれない。あ、なんかそれあり得る気がしてきた。あっぶねー。こりゃマジでとっとと帰って寝ないと、気がついたら道端に転がってました、とかなっちまいそうだ。そうなったら笑えねーぞ。
気を取り直してもう一度自転車を漕ぎ出そうとした。
その瞬間、まるでこのタイミングを見計らっていたかのように、再び地面が揺れたような気がした。
……寝てない。今は寝てないぞ、俺。
再び周辺に視線を巡らせて見ても、目に見える変化は一つとしてなかった。
今のは、確かに揺れた。今度は間違いない。地面につけている足の裏から振動が伝わってきたのだ。
……いや、伝わってきている。現在進行形で。断絶的に、けれど確実に連続して。
地震、か？
地面が揺れた、ということで真っ先にそう浮かんだが、しっくりこない。それにしては揺れ方が妙なのだ。最初の一揺れが錯覚じゃ

なかったとして、あれが一番大きかった。あれを本震だと仮定して、それについては違和感を訴えられるほどなにかを感じたわけじゃない。けど、今感じている連続性のある揺れを余震だと言う仮定は、どうにもしっくりこない。地震っつったら横揺れがメインだろ、普通。しかし、今俺が感じている振動は、俺の感覚が狂っているのでなければ、縦方向だ。

——どしん……どしん……どしん……

……ちょっと待て。

なんか揺れと音がだんだんでかくなってきてるような気がすんだけど。気のせい？　俺の気のせいか？

しかも、揺れの感覚がほぼ一定だ。まるで巨大ななにかが歩いているみたいな……。

——どしん、どしん、どしん、

気のせい、なんかじゃ、ない。

どんどん、近づいてきている。

数十メートルほど先の街灯の光を、黒いなにかが遮った。それがなんなのか、わからなかった。俺は別に目が悪いわけじゃない。街灯がそれを照らしたのはほんの一瞬だったけど、たしかにその姿をとらえたんだ。けれど、わからなかった。理解できなかった。

つまり、それは理解の範疇を超えていた。

狼、のように、見えた。頭だけ見て、瞬間的に狼だと思った。犬という線も一瞬浮かんだけれど、街灯に照らし出された凶暴そうな顔つきが狼だと思わせた。けれど、すぐにそれはあり得ないと打ち消す。その頭部が、軽く民家の塀の高さを超えていたからだ。塀のてっぺんよりもむしろ街灯の照明部分とのほうが差が小さかった気がする。……そんな狼がいてたまるか。

――どしん、どしん、どしん、……

大体、狼の足音にしちゃおかしいだろ、これ。狼は四足歩行だ。しかし、この音の鳴り方はどう考えても二足歩行。さらにある程度の重量がなくちゃおかしい。

おかしいんだ。

――どしん。

足音が止んだ。

俺の数メートル先で。

そこに立っている《なにか》を、見上げる。街灯の頼りない光が、それを照らしている。

……あるわけが、ないんだ。

人間の倍以上でかくて、二足歩行する狼なんて、いるわけない。

「……いつの間に寝ちまったんだろうな、俺」

呟いた声は、自覚できるくらい不安定になっていた。

笑おうとして失敗した。

あるわけがない、これは夢だ。何度そう繰り返しても、目の前のものは霧散しない。低い唸り声と反響するような息遣いを聞くほどに、現実味が地面から足を伝って這いあがる。

それを認めたくない。目の前にあるものはあるはずがないものだ。こんなものが、こんなことが現実にあるはずがない。理性がそれを知っている。けれども、じゃあ目の前にあるものはなんなのだと脳裡で囁く声がする。だから夢なんだって、と理性が言い返す。

狼のようで狼ではありえない《なにか》が、腕（いや、前足か？）を振り上げる。

そうだ、夢だ。多分どっかで意識が夢の中に落ちてしまったんだ。今頃俺の本体は道の隅かど真ん中にぶっ倒れてすやすや寝息をたてているに違いない。

獰猛な口が細く開く。その隙間から蒸気のように溢れ出す白い息。眼が細く歪む。ニタァと笑っているように見えた。

夢なんだ。……夢なんだろ？

――だから、早く覚めてくれよ……！

04　謎の少女

動けずにいる俺の目の前で振り上げられた大きく太い腕が、俺めがけて振り下ろされる――

ということは、なかった。

《それ》がぐらりと斜め前へと傾いて、俺を避けるように倒れ伏した。……俺にぶつからなかったのはただの偶然だろうけど。

なんで突然倒れたのか、俺にはわからなかった。でかい太鼓のように大きな音を打ち鳴らしている心臓の音を聞きながら、そろそろとぎこちない動きで緯線を動かす。視界の中に、《それ》から氷……というか、氷柱のようなものが突き出ているのが見えた。星も月もない夜の中、それは街灯の光を受けてきらきらとした輝きを溢していた。

……氷柱？　なんで？

たしかに、もうずいぶん外気は冷え込んできているけど。この地域は初雪もまだだ。氷柱なんてできるわけがないし、たとえ雪が降っていたとしても雪国でも雪山でもないこんな住宅街で氷柱を見ることはない。しかも、俺の腕より太くて長いものなんて。これじゃ氷柱なんて可愛いもんじゃない、凶器だ。

こんなもの、いったいどこから……。

考えようとするが、なにが起こったのかもいまいち理解できていない、突然降って湧いたわけのわからない恐怖のせいで少々麻痺を起こしている思考能力じゃ、たいした考えは浮かびようがない。

そうして立ち尽くしているうちに、キィ、と聞き慣れた金属質な音が耳に飛び込む。これは、自転車のブレーキの音だ。

視線を再び前方へと向ける。

そこにいたのは、一人の女だった。

キャスケットを深くかぶっているせいで顔はよくわからないが、キャスケットに収まっていない横の髪が肩ぐらいまであって、男に

しては小さすぎて細っこくて、だから相手が女だとわかった。厚手の上着、細めのジーンズに履き古したようなスニーカー。服装に特別不自然なところは見えなくて、女がまたがっている自転車もごくごく普通のものだった。

普通だ。

その右手に、ゲームや漫画なんかに出てくる魔法を使うようなキャラクターが持っていそうな杖みたいなものを、握っていなければ。

俺はしばし呆然と相手を見ていた。相手は相手で口をぽっかり開いたまま動かなかった。

やがて、

「きゃー！？」

「わー！？」

相手のほうが取り乱して大声を上げた。つられて俺も叫んだ。女は自転車にまたがったまま俺を見て、声を震わせた。

「ちょ、な、ななな、なん、なんで！？　なんでここにいるの！？」

「なんでって……帰り道だよ！」

「帰り！？　遅っ！　もうすぐ九時だよ！　不健康だよ！　不良だよ！」

「ちょ、なんでそこまで言われなきゃなんねーんだ！？　部活だ、部活！　不可抗力！　不良じゃねーっつの！」

反射的に答えてから、部活は七時前に終わっていたのだからこんな時間になってしまったのは俺（と、真嶋と御端）の勝手だということに気づいた。まあ、訂正するほどのことでもないだろうから即座に忘れることにする。

それより、目の前の女のほうが重要課題だ。

女はキャスケットの下で驚愕の表情を浮かべ、次いで憎々しげに言い放つ。

「マジでか！？　もうすぐ十一月半分過ぎたよ！？　大会も終わってるはずでしょ！？　もうシーズンオフなんでしょ！？　どんだけやる気！？　ちくしょーなんなの野球部！」

……ん？　あれ、俺野球部って言ったっけ？

疑問が過ぎるが、それを振り払うように頭を軽く振った。

それはとりあえずどうでもいい。とりあえず。そんな些細な引っかかりは後回しだ。

「なんでもいいけど、とにかく説明を要求するぞ！　お前は誰だ！　その杖みたいなもんはなんだ！　そして《これ》は一体なん、……」

視線を前方の女から、倒れている《なにか》に向けた。

そこにはなにもなかった。

言葉が中途半端になり、俺は十秒ほど無言のまま《なにか》が倒れていたはずの場所を眺めた。目をこすって再確認もしてみたが、そこにはやっぱりなにもない。

「……あれ？」

いやいやいや、おかしいだろ。おかしいってば。あの黒い狼もどきはちゃんと音をたててそこに倒れたはずだ。俺はそれをしっかりこの目で見ていたのだ。それともなにか、俺はやっぱり夢を見ていたのか。

視線を前方の正体不明の女に向け直す。女は困り果てた様子で「あー」と呻き、左手で顔を覆っていて、右手にはファンタジーなフ

ィクションに出てきそうな杖が握られている。やっぱりある。
もしさっきのが夢なのだとしたら、今のこの状態すら夢の中のはずだ。だってあんな杖、ありえるのか？　足腰が弱いひとが使うようなものとはまったく違うぞ。

「……いや、まあ、見られたもんはしょーがないよね、うん」

女は勝手に納得し、自転車を道の端に置いて、歩いて俺に近づいてきた。俺のほうは自転車に乗ったまま、眼前に立った女に気圧されるように背筋をそらせた。女は俺の様子なんぞ気にした様子はなく、ただ俺の顔を見上げてきた。キャスケットが作る影のせいで、顔はやっぱりよく見えないが。

「怪我はない？」
「あ、ああ……」
「そう、よかった。私、怪我を治すことはできないから」

自転車に乗ったままというのが居心地悪くて、とりあえずのそのそと自転車から降りながら返事をする。
降りてみてはっきりわかったが、その女の背は俺より低かった。……認めたくないけど、俺はあんまり背が高いほうじゃない。女はその俺より小さい。小さい、という第一印象は間違っていなかったわけだ。百五十……はあっても百六十はないだろうか。まあ、男女で身長差がある程度存在するのは当たり前なんだけど……。
そんなことを考えている俺のすぐ傍で、女は安堵したように頷いて、続けた。

「傷がないなら問題ないね。暗示かけてあげる」
「……は？」
「巻き込まれたくないでしょう？」

キャスケットの影から覗く二つの目が、まっすぐ俺を見上げた。俺の返事を待たずに、女は俺に向かってその手の杖を掲げる。いや、だから、それがなんなのか、アンタはどこの誰なのか、さっきの狼のようで狼じゃないあれはなんだったのか。

……聞きたいことは山ほどあるってのに、女はなに一つ答える気はなさそうだ。問答無用、有無を言わさない、ってのは、こういうときに使うのだろうか。

混乱する頭で考える。

暗示って、つまりあれか。今見たことを忘れろとか、今見たものは夢だとか、そういうベタな方向か。そういうのって効果あんのかな。実際に見たこともやったこともやられたこともないし、よくわかんねーな。

巻き込まれたくないだろうってのは、どういうことだろう。どういう事態にかかっているのだろうか。とにかく、不穏な言葉には違いない。たしかにさっき俺の目の前で起きた出来事はおかしい。おかしいところがありすぎて、どっからツッコミ入れりゃいいのかもわからない。このままだと、そのおかしいことに俺が組み込まれてしまうというのだろうか。……そんなのはたしかにごめんだ。当然だろ？　誰だって自分の身が可愛いさ。

なのに……なんでだ？

女の言葉に肯定を返すことができない。頭の中でがんがんとなにかが音をたてている。思考が一つもまとまらない。

その中で、たった一つ、浮かぶこと。

今、ここで、こいつの言うことに頷いちゃいけない気がする。その想いだけが、今俺を駆り立てようとする。

「ちょ、ちょっと待てって！　お前、……」

「意見は聞きませーん。大丈夫大丈夫、怖いことなんてないからさ」

女を止めようと口に出した言葉を、途中で切った。それは女に遮られたからじゃない。
女の向こう側の街灯が、闇に食い潰されるのを見たからだ。
それがなんなのか、考えることはなかった。考える余裕なんてものはなかったし、その必要もなかった。
驚愕から目を大きく開き、短く息を吸い込み、唇が震えた。

「っ、後ろ！」
「えっ、！！」

俺の声に女が後ろを振り返ったときには、もう遅かった。

05　覚醒

気がつくと俺は民家の塀に背中から衝突していた。コンクリートの壁は硬くて、叩きつけられた衝撃で肺が圧迫され、一瞬呼吸の仕方を忘れた。盛大に咳込んでからどうにか呼吸を取り戻すと、俺が立っていたはずの場所にはあの黒い獣がいて、そのでかい手に潰されそうになっている女がいた。

「ぐっ……く、このっ、……馬鹿力っ……！」

女の体は地面に倒れていて、胸の上に杖を載せている。黒い獣の前足は、杖の数ミリ上で留まっているように見える。ただし、その太く鋭い爪は女の体に食い込み、傷つけている。特に右腕は、爪が完全に貫通しているように見えた。

ぐぐぐ、と黒い獣が腕に体重を乗せる。女は厳しい顔つきでそれに対抗する。《目に見えないなにか》が邪魔をしているみたいに、黒い獣は女を押し潰すまでには至っていない。

女が被っていたキャスケットは襲われた衝撃で飛んでしまったらしく、隠されていた顔が見えるようになっていた。その顔に見覚えはないが、年齢は俺とあまり変わらないように見える。

女が瞳だけを動かして俺を見た。

「っ……なにしてんの！」

「え……」

「逃げて！」

それは、これ以上ないほど、正しい指示だった。

女を襲っている黒い獣は、さっき俺を襲おうとしたやつと同種のものに見える。人間の倍以上のでかさがある体に、狼みたいな顔。

よく見たらその輪郭はまるで燃え盛る火のように揺らめいていた。
現状を考えて、あの女はおそらく俺には理解できない不思議な力が使えるのだろう。そうとしか考えられない。だから今、潰されずになんとか持ちこたえていられるのだ。
そこに、特別な力なんてなんにもない、ただの高校生が入り込んだら？
答えは簡単。やられておしまいだ。
だから、《逃げろ》って言う女の指示は正しい。なにも間違っちゃいない。死にたくなければ逃げるしかないんだ。あの黒い獣は意識をあの女にだけ向けているから、今ならきっと、逃げ切れる。

「っ……」

ぎり、と奥歯が鳴った。
ずるりと手のひらが地面を滑り、その指先が硬く冷たいものに触れた。自転車だ。少々形が歪んで崩れているが、俺の自転車がそこに倒れていた。黒い獣が飛びついてきた衝撃で吹っ飛んだせいだろう。
動こうとして、体が震えていることに気づいた。手も、足も、体全部が情けないくらい震えている。歯も上下でぶつかり合って、かちかちと小さく音を立てている。武者震い、だったらかっこよかったのかもしれないが、これは単純な恐怖によるものだ。危険が目の前に迫っている。それを理解した理性が本能と一緒になって恐怖を訴えているのだ。
恐怖の源に目を向ける。でかい図体の、闇そのもののような獣。鋭い牙を並べた口を開き、そこからあふれる呼気は白く染まり、こぼれた唾液が女の顔を汚した。
女の顔が歪んだ。そこにあるのが嫌悪か苦痛かは、俺にはわからない。
アスファルトの上にどろりとした水溜りのようなものが広がって

いく。
……血だ。
そりゃ、女は怪我を負っているんだから、血が出るのは当然だ。しかも、あんな太い爪が右腕を貫通して、地面に縫い付けられる形になってるんだ。流れる血の量も半端じゃないだろう。想像もできないが、相当痛いはずだ。
それは、俺をかばった結果だ。他人をかばって自分が大怪我する。そんなん、馬鹿のすることだろ。
女は俺に「逃げろ」と言った。それは《正しい》。
……けど、《正しいこと》が《最善》だって、誰が決めたんだ……？
目を閉じて、息を大きく吸い込んで、ぐっと恐怖ごと飲み込んだ。一瞬、体の震えが止まった。俺は素早く立ち上がり、飛びつくように自転車を掴み、背中と左ひじから感じるちりっとした痛みを無視して、その自転車を持ちあげた。
「く、ぉんのぉ！！」
精一杯の力で投げつけると、自転車は黒い獣の肩にぶつかった。獣の視線が俺に向く。意識が俺に向かう。ごくん、と急激な緊張から口内の唾液を飲み込んだ。
女は生じた一瞬の隙を見逃さなかった。
「っ、《ザキ・クレスタ》！」
その声に呼応するように鋭い氷の刃がどこからか現れ、黒い獣の体を飾るように突き刺さった。黒い獣が驚いたように悲鳴を上げて体を引いて数歩分退き、必然的にその鋭い爪から女を解放することになった。その隙に女は這いずるように獣の下から抜けだそうとする。が、怪我のせいかその動きは決して素早いとは言えない。見て

いられなくて、傍に駆け寄って半ば引きずるみたいに獣の下から助け出した。そのまま、黒い獣と距離を取る。
女が歪んだ顔で、俺の顔を見上げてきた。

「っ、……馬鹿じゃないの……逃げてって言ったじゃん……」
「うっせーよ……怪我してる女一人残してなんていけるかっつの」
「……馬鹿だ」
「馬鹿で結構だ！　んなことよりお前、大丈夫か……？」

聞いてはみたけど、「大丈夫か」なんて聞く意味はないような気がした。獣の爪から解放された右腕からは今もだらだらと血が流れ出ていて、見ているとこっちまで痛いような気がしてくる。左肩も爪の餌食になっていたようで、服が裂け赤く染まっている。
上着を引きちぎって止血とかしてみるか、でもやり方詳しくは知らねーしな、とか考えていると、女が再び口を開いた。

「……今からでも遅くないから、逃げて」
「できるか！」

女はなおも「逃げろ」と言う。少しだけ体に震えが戻ってきたが、俺の口は俺の気持ちのまま動いた。
女は俺の問いかけに一切答えない。答える気がない。自分の言いたいこと言うだけで、俺の言葉なんて聞きやしない。
なら、俺だって聞いてやらない。やりたいようにやってやる。

「目の前で俺かばって怪我したやつがいるってのに、それを放っていけるわけねーだろ！」
「……馬鹿だ」

女の顔が、くしゃりと泣きそうに歪んだ。言ってることは可愛く

ねーけど……なんか、その顔見たら……「絶対助けてやんねーと」って、余計に強く思った。
とにかく、ここにいたって事態は好転しない。まずはあの黒い獣から離れねーと。
女の腕を肩に回し、立ち上がろうとする。俺の次の行動を察して、女が力なく言う。

「無駄だよ……人間の足じゃ、すぐあいつに追いつかれる」
「……戦って倒すしかねーってか……」

たしかに、あの巨体だ。一歩のでかさも半端じゃないだろう。走ったところで一瞬で追いつかれる可能性が高い。自転車ならまだ逃げ切れる可能性があるかもしれないが、あいにく俺の自転車はヤツに投げつけちまったし、女が乗っていた自転車は、まだ無事ではあるが、それを手に入れようと思うとヤツの横を通り抜けなきゃならない。
黒い獣がこっちを見た。動物の感情なんて生まれてこのかた理解できたためしがないし、普通わかるはずもないのに、とてつもなく怒っているように見えた。腕に刺さっていた氷の刃がずぶずぶとヤツの体内に飲み込まれていく。
……一刻の猶予もねーってか。

「……どうすりゃいい」
「へ……？」
「弱点とか、なんかねーのか、アレ」
「……え、まあ、ある、けど」
「はやく教えろ」

女の体を放し、その右手から杖を奪い取る。それ以外に武器にできそうなものが、手近にない。

俺は立ちあがって、女をかばうように前に出る。震える足は、左の拳を叩きつけて強制的に抑え込んだ。

「ちょ、……」

「……あんま動くな。痛いだろ、それ」

「……」

押し黙ったのは、図星だから、か。

ずん、と黒い獣がこっちに向かって一歩踏み出してきた。俺は杖を剣に見立てて握り、その先端を獣に向けた。剣なんて、中学の体育の授業で剣道やったくらいだけど、まあ経験がまったくのゼロよりかはマシだろ。

「で、弱点は？」

「……頭、か……胸の、真ん中。そこに一定以上のダメージを与えられたら、勝てる」

回答を聞き、改めて黒い獣を見た。

……胸でも俺の頭より高い位置にありそうなんですけど。届くかな……。しかも一定以上の一定って、どのくらいを指すんだ。

でも、やるしかねぇ。やるしかねーんだ。

ぐっと杖を握る右手に力が篭った。手が震えている。……武者震い、これは武者震いだ。そうだろ、俺。

「……井澄くん」

「なんだ！？」

うわ、声裏返った！　マジカッコ悪ぃ！

俺の情けない反応に気づいていないのか、気にしていないのか、女は続けた。

「……武器なら、他にもある、けど……」
「へ！？」
予想外の言葉に、思わず背後を振り返る。女は気まずそうに俺から顔を逸らしていた。
「……ごめん、今のなし。それを渡したら、君を完全に巻き込むことになっちゃうから。……それ、返して。やっぱり私がやるよ。だから君は早く逃げて」
「……」
女が再び俺を見て、俺に左手を差し出してきた。杖を渡せ、ということだ。
俺は首を動かして、眼前の黒い獣を見た。隙だらけなはずの俺に飛び掛ってこないことが気味悪い。その見た目からして気味悪いってのに、その姿がどうやって俺たちをいたぶろうかと考えているようにも思えて、余計気味が悪い。
俺は大きく息を吸い込んで、冷たい空気で肺をいっぱいにして、盛大に吐き出した。
肩越しに、女を見て、答える。
「わかった。……巻き込んでくれ！」
女は呆然とした表情を俺に向けた。俺の答えが相当意外だったんだろう。
そりゃ、こんなわけのわからないことに巻き込まれるなんてごめんだ。その気持ちは否定しない。今この場を逃げだせば、逃げ切れれば、そうして夢ってことにしてしまえば、このふざけた出来事に関わらなくてすむのかもしれない。その時は、それでいいかもしれ

ない。けど、あとで絶対考えるんだ。あれは本当に夢だったのか、あの時の女はあれからどうしたのか、どうなったのか……。考えてるうちにきっと、俺をかばって怪我をした女を見捨てて逃げ出した自分を、許せなくなる。

巻き込まれるのも嫌だけど、そんな気持ちの悪い、出口のなさそうな後悔に纏わりつかれるのはもっとごめんだ。

「……馬鹿」

「お前、それ何回目、……！？」

俺が言い返そうとすると、女は傷を負っているとは思えない素早さで立ち上がり、俺の体に体当たりをかましてきた。俺は再び道の端に投げ出されたが、今度はどうにか塀への激突は避けた。

なにかが潰れるような、嫌な音がした。

顔を上げると、さっきまで俺が立っていた場所には黒い獣がいて、その大きな手が女の右足を捉えていた。血が流れる様子はないけど、女の顔が辛そうにゆがんでいる。

「っ、おい！？」

また、かばわれた。

前方にあいつがいるって、いつ襲ってくるかわかんねーって、ちゃんとわかってたはずなのに。ちゃんと意識してたはずなのに。また、助けられた。

自分の情けなさに泣きたくなってくる。

泣いてる場合じゃないのは重々承知してる。でも、この感情をコントロールする方法がわからない。知っているなら、頼むから誰か教えてくれ。

涙ぐみ始めた目を女と獣から逸らせずにいると、ぐっと女が左腕を動かした。その手にはいつの間にか、俺の手から奪い返されてい

た杖。杖の頭が、俺に向けられる。
鋭く瞬く女の瞳が、俺をまっすぐにとらえていた。
「……”眠る魂よ”」
「っ！？」
女の声が不思議に反響すると同時に、どくん、と心臓が大きく鳴った。体中に血が巡る感覚が湧き上がってくる。
「”忘れえぬ誓い、置き去りの約束、その強き願いを具現せん”」
頭から足の先まで熱が充満していくような気がする。心臓の音が頭の中にまで響く。その奥で、なにかがなにかを囁いているような気がしたけれど、心臓の音がうるさくて、ちっとも聞き取れない。
なんだ……なんて、言ってるんだ、なあ。
「……起きろ、《ナイト》！」
――どん、と大きな音がした。
体の奥が鳴いた。
強い光に包まれて、自分の指先さえ見えなくなった。けれど恐怖は微塵もない。その光は熱くもなく、もちろん冷たいわけもなく、ただ俺を導く。
光が消える頃、俺の手には一振りの剣が握られていた。剣道で使う竹刀とか、木刀なんてものでもない。西洋の中世で使われていたような、あるいはファンタジーフィクションに出てくるような、剣。そんなもの、初めて握るはずなのに、まるでずっと以前から扱っていたように俺の手に馴染んでいる。
軽く地面を蹴ってみた。体が浮くように跳ねる。なんだろう、体がめちゃくちゃ軽い。

前方の黒い獣を見る。その片手はいまだに女の足をおさえているが、顔は完全にこっちを向いている。
あんなに恐怖心を掻き立てるような、見るからに凶暴そうな姿をしているのに、今は欠片ほども恐いとは思えない。
なぜだろう。確信できた。

――俺は、こいつに勝てる。

剣の存在を確かめるように、手の力をいったん緩め、再度握り直す。
そして、黒い獣に向かって、思い切り地面を蹴った。

06　後悔

傷を負った少女は、その光景をただじっと眺めていた。より正確に言えば、目が離せなかった。

少女に圧し掛かっていた《敵》は少女の脇に音を伴って倒れ、徐々にその存在を黒い煙へと変化させていき、やがて完全に存在しないものとなった。その光景を見届ける度に湧き上がる感傷をやり過ごし、一つ息を吐き出した。

地面に倒れている少年へと視線を移動させた。

一刀両断。

少年が見せたものは、そう表現するにふさわしい光景だった。

少年は軽く地面を蹴り、《敵》の頭上へ跳び上がり、振り上げた剣を振り下ろした。そこに込められていたのは、無意識ゆえの全力。その一連の行動こそが、少年の内に秘められてきた《力》だ。

剣の出現は予想の範囲内だったが、少年が見せた異常なほどの跳躍力には思わず目を剥いてしまった。しかし、よくよく冷静になってみれば、それは意外でもなんでもなかったのだ。

「……そりゃ、そうか。私の中に《風》の力は、ほとんどないもん、ね」

少女は意識のない少年の顔を見ながら、小さな声でたしかめるように呟いた。

少女は《魔術》なるものを操ることができる。本来ならばそれは、少女が死んでも表に出てくることはなかったはずの《力》だが、少女の内に眠っていたそれが呼び覚まされて以降は、むしろ少女の一部として馴染んでいる。

魔術には基本属性とされる属性が四つ定められている。少女はその四つの属性の魔術をすべて扱えるはずだ。……本来なら。現実と

して、少女がまともに扱えるのは四つのうち三つ、つまり一つの属性に関してはほとんど魔術が使えない。そのたった一つが、《風》属性だ。

まったく使えないわけではなく、風を起こす程度のことは可能だ。しかし、少女が起こした風でできることは、物体を遮ることと物体を動かすことで、攻撃性は皆無と言っていい。

その《風》はどこに行ったのか。

少女は今更のように、その答えを実感した。

少年は眠っている。疲れているのだろう。ハードな部活動の後の出来事だ。この《力》は、解放している間は平常時より体が軽いし、怪我をした際の痛みも薄い。大抵のことでは疲労を感じることもないし、傷の治りも速い。けれど、通常状態に戻った途端、どっと疲れが押し寄せてくる。少年が眠ってしまうのも無理はなかった。

少女は静かに意識を研ぎ澄ませた。少女が張ったアンテナに、新たな《敵》の気配は一つも引っかからない。今しがた、目の前で眠る少年が両断したもので今日は最後らしい。随分と都合のいい――

ふと、不快な想像が浮かぶ。

自分は遊ばれているのではないか、と。

《敵》の考えの、根本的な部分は読み取れる。しかし、細部に関しては少女にはさっぱり理解不能だ。直接顔を合わせたことも言葉を交わしたこともないのだからそれも仕方がないのだろうが、今日ばかりは《敵》の不気味さが気にかかる。

この怪我では、立ち上って普通に歩くくらいまでは今晩中になんとか回復できるかもしれないが、戦闘となると相当厳しい。それを理解しているように、一切の干渉を断った敵。良心的だ、などとは思わない。

――そんな状態のお前を攻撃してもつまらない。

そう、笑われているような気がしてきて、ものすごく不快だ。

そうである確証がなければ、そうでない確証もない。そうは思っても、腹の底が煮えるような感覚を消し去ることができない。

しばしの間、両目と閉ざして静かな呼吸だけを繰り返す。徐々に体内の熱が平常に戻っていくのを自覚し、少女は開いた目を改めて少年へと移した。

考え方を変える。たとえ遊ばれているのだとしても、今の状態においては間違いなくありがたいことだ。今襲いかかられて困るのは他でもない自分なのだ。負傷した身で他者を気遣いながら戦う余裕はない。

今は甘んじるしかない。しかし、いつか絶対その足元を掬ってやる、とまみえたことのない《敵》に向けて反撃を誓う。

少女は気持ちを切り替え、立ちあがろうと試みた。しかし、右足がぴくりとも動いてくれない。「あれ？」と思い、次いでずきずきと神経に訴えかける痛みを自覚し、足の方に目を向けてみる。血が出ている様子はないが、集中しなくても芯に響くような痛みを感じ取れる。とっさに《風》でガードしたことで、潰されるという最悪の事態は回避できたが、与えられた衝撃を完全に無効化することはできず、骨に影響を与えてしまったようだ。あの瞬間は他のことに集中していたのであまり気にしていなかったが、そういえば「みしっ」という嫌な音がしていた気がする。ヒビくらいは覚悟しなければならないだろう。こうして《力》を解放したままもう数分じっとしていれば、なんとか動かせるくらいにはなるだろうが……。

肩と腕の傷も、血はすでにほとんど止まっているが、今晩中に痛みが消えるまでの回復は難しいだろう。通常状態に戻った後のことは、想像するのも嫌なので考えないことにした。

現時点で立ち上がることを断念した少女は、どうにか這いずって少年の傍に寄った。健やかに寝息をたてている少年を遠慮なく観察する。見たところ、手をすりむいている以外は、目立つところに傷はない。しかし、服の下はわからない。背中を塀にぶつけたりしていたようだから、すりむいてはいなくても打ち身にはなっているかもしれない。

なんにしろ、少女は傷を癒す手段を持っていない。

「……なんで、やっちゃったかなぁ……」

少女は、後悔していた。

巻き込んでしまった。本人が「かまわない」と言ったとはいえ、やはりしてはいけないことだったという気がした。

たしかに、少女の体は限界が近かった。右腕と左肩の負傷、さらに右足骨折の可能性。本来なら気絶したとしてもおかしくない状態だ。更に、《敵》を倒した後の後始末という仕事が、少女には残されていた。それを考えれば、余力を残しておく必要はあった。少年を巻き込んだのは、そういう意味では非常に合理的だ。けれど、無理を押してでも、巻き込むべきではなかったのではないだろうか。

いや、巻き込むべきではなかったのだ。

なにより、巻き込みたくはなかった。それは、少女が二年もの間、ずっと胸に抱き続けた願いだったはずだ。

何故、こうなってしまったのだろう。何故よりにもって、襲撃が今、このときだったのだろう。あと数分でも違えば、こうはならなかっただろうに。

いるかもわからない運命を操る神様に罵倒を浴びせたくなる。

いったい、どこまで抱いた願いを切り裂くつもりなのだろうか。自分の願いはそんなに難しいことなのかと、世界の理不尽さにやり場のない憤りが降り積もる。

恨み言を胸の内で呟きながら、しかし、少年に重なった《彼》の姿に涙がこぼれそうになったことは誤魔化しようがない事実だった。

切なくて。懐かしくて。……嬉しくて。そう感じてしまった自分に眉を寄せながら、それでも湧き上がってきた感情を振り払うことはできなかった。

ぐっと目を閉じ、気持ちを落ち着かせてから再び目を開ける。

少年は眠っている。なにも知らない、安らかな顔だ。その顔だけ見ていると、本来の年齢より幼く見えるのが不思議だ。

今、少年は《夢》を見ているのだろう。
少年が見ているだろう《夢》を想像して、悲しくなった。それは少年が知らなくていいことのはずだった。知らないまま、生きていけるはずだった。けれど、《彼》は《起きた》。そうなった以上、少年は《夢》を見る。きっと、あたたくて、けれど、とても悲しい《夢》を。
その《夢》の最後に、少年はなにを思うだろう。

「……後始末、しなくちゃ」

どれだけ悔んだところで、過去は変わらない。足を止めて振り返ることに意味がないことを、少女はとっくに痛感していた。
さしあたって、少女が今しなければならないことは、この場を何事もなかったかのように取り繕い、少年を家へと送り届けることだ。

01　残ったもの

視界はぼやけていた。どこか異国風の街並みだということだけ認識できたけれど、それ以上の細かいことは一切わからない。

俺の目の前には、ひとりの女の子がいた。

その女の子は寂しそうに笑っていた。ぼやけていて、顔はよく見えないのに。それでもどうしてだか、年に似合わない大人びた笑い方だと思った。

笑ってほしいと思った。

そんな寂しい笑顔じゃなくて、もっと心からの、幸せで幸せでどうしようもなくてこぼれるような、そんな笑顔を見せてほしいと思った。

小さな手、小さな体、寂しい笑顔。

ただひたすらにその身を守ってくれる誰かがほしいと言うのなら、俺がなってみせよう。俺が、君を守ってみせる。

――だから君は、どうか笑っていて。

＊　＊　＊

気がつくと、自分の部屋のベッドの上に寝転がっていた。

目覚めた直後は、仰向けの状態で、はっきりしない頭で、しばらくぼんやりとしていた。

ようやくまともに思考が動き始め、まず考えたのは、「なんで俺は自分の部屋で寝ているんだろう」ということだった。本来なら疑問に思うこと自体おかしいことなんだろうが……昨晩、無事に帰宅したという記憶がどうにもすっぽり抜け落ちている。というか、まったくない。

次に、「あれは夢だったのだろうか」と考えた。寝て、目覚めてみれば、あんなにリアルに感じていた出来事もどこか遠い世界のことのように思えた。

もぞもぞ動いてうつぶせになり、枕元の目覚まし時計に目を向ける。いつもより二十分ほど早い朝だ。まだ寝ていたいとも思うが、二度寝なんてしたら遅刻確定。監督に怒られる。……それは嫌だ。監督に頭ぐりぐりされるとすっげー痛んだよ。

高校生になって、初めて覚えた「休みたい」という気持ちにフタをするように、のそりと体を起こす。

重い。だるい。マジで休みたい。でも練習を休むのは嫌だ。

……大概、野球馬鹿だな、俺も。

苦笑して、気分を切り替えるために精一杯伸びをした。残念ながら全然すっきりしなかったが。

「……シャワーでも浴びるか」

少しくらいすっきりするかもしれない。……昨日の晩、風呂入った記憶ねーしな。

ベッドを降りてから、ベッド脇にスニーカーが揃えてあることに気づいた。五秒くらいそれをじっと眺めてから、軽く息を吐き出してそれを拾い上げ、部屋を出る。

ギシギシと階段を踏み鳴らし、一階へと降りる。リビング・ダイニングにはすでに明かりが灯っている。おふくろはもう起きているんだろう。なるべく気付かれないように気を遣いながら、玄関に向かった。部屋から持ってきたスニーカーを玄関にそっと置き、それから風呂へ向かう。

洗面所に入って鏡に映る自分の姿を見て、今更ながら制服を着ていることに気づく。……制服を着たまま寝ていたわけだ。上着は結構頑丈な生地だから問題ないけど、その下のシャツはちょっとしわしわしてる。……ま、いっか。普段からピシッと整えてるわけじゃ

ねーし。
それを脱ごうとして、両手に残っている擦り傷に気付く。
「……」
観察してみると、赤黒いかさぶたができていて、血はしっかり止まっている。屋外で負った傷ならもっと汚れていそうなものだが、不思議なほど、ちゃんと水で洗ったみたいに綺麗な状態だ。
制服を脱いで、それを一通り検めてみるが、多少皺になっていること以外に変わったところはない。不思議なくらい、汚れていない。
後頭部を軽く掻いたが、それでなにが浮かぶわけもない。
脱いだものを適当に畳んで置いておき、風呂場に踏み入る。十一月後半に突入しているこの時期、冷えきったタイルを踏みながらシャワーヘッドからお湯を引き出す。水のほうが頭の中がはっきりすっきりするような気もするけど、この季節になれば水はものすごく冷たくなる。軟な体をしているつもりはないけど、うっかり風邪をひくのはいただけない。
「っ……」
背中にお湯が染みた。でも、耐えきれないほどじゃない。いくらかぴりぴりする程度だ。多分、両手みたいに多少擦り傷ができているんだろう。色も、青くなったり黒くなったりしているかもしれない。わざわざ無理して背中を確認するつもりもないが。
それなりにさっぱりして、脱いだ制服を再び着込む。多少汗のにおいがするが、夏に比べれば断然マシだ。
リビングに入ると、台所に立っているおふくろの姿が視界に入った。おふくろは俺に気付いて、手を止めて顔を見せてくる。
「おはよ、孝弘」

「おはよ」

朝の挨拶だけして、また作業に戻る。律儀な母親だ。

「なぁ、おふくろ」

「んー？」

「俺、昨日何時頃帰ってきた？」

「えぇ？　ちゃんと時計見てたわけじゃないけど……でも九時過ぎには帰ってきてたと思うわよ」

「牛乳、買ったと思うんだけど、ちゃんと渡した？」

「もらったわよ。ちょっとパックが潰れてたけど。あ、後でお金渡すから」

「……晩飯食ったっけ」

「食べてないわよ。すぐ寝ちゃったじゃない。お風呂も入らないで」

「へぇ……」

「なに？　寝ぼけてるの？」

「んー……」

覚えがねーんだよ。……とは、さすがに言えないか。

重ねまくった質問に返ってきた答えからすると、おふくろの中では俺がちゃんと玄関から帰ってきて牛乳も渡して自室に入ったことになっているらしい。自分の記憶とおふくろの記憶の食い違いに小さくため息をついた。

とりあえず、腹減ったな。

「晩飯残ってんの？」

「残ってるわよ。食べる？」

「食う」

「じゃあ温めなくちゃね」

「そんくらい自分でするよ。冷蔵庫？」

「ええ」

飯をあっためてる間に、一応手のひらの傷に黄色い消毒液をかけ、絆創膏をぺたぺたと貼った。そのままにしとくのも気になるし、擦れると痛そうだし、と思っての行動だったけど、すぐに後悔した。手のひらって、絆創膏が定着しにくいんだな……。すぐはがれそう。余計気になるな、こりゃ。でも、もう貼っちまったし、とりあえず完全にはがれるまでは放っておくことにする。

昨日食わなかった晩飯を朝飯として平らげ、おふくろが用意してくれた弁当をかばんに詰め込み、いつも通りの時間に家を出た。

自転車はガレージの前に置かれていた。いつもならガレージの中に収めるんだけどな。

ざっと点検してみたところ、壊れているということはなさそうだった。何事もなかったかのように、元のままだ。

五秒くらい考えてみたが、考えたところで答えが転がってくるわけもない。あきらめて自転車に乗り、学校に向かってペダルを踏んだ。

通い慣れた道の途中で、少しだけ足を止めて、ざっと周囲を見回した。

いつも通りだ。おかしなところはなにもない。もっとも、普段からそんなに気をつけて周囲を見ているわけじゃないから、ちょっとした変化じゃ気付かないだろうけど。とりあえず、違和感を覚えるほどの変化は存在しなかった。

周囲に誰もいないことをいいことに遠慮なくどでかいため息をつき、再びペダルを漕いだ。

学校に到着し、自転車置き場に自転車を置きに行く。そこには先客――御端がいて、ちょうど自転車のロックをしていた。

「はよ、御端！」

「お、おはよ、井澄くん！」

声をかけると、御端はこっちを見てぴっと背筋を伸ばした。
御端の自転車の隣が空いていたので、そこに俺の自転車を停め、ロックをする。その間に御端のほうはロックし終わっていたが、律儀に俺が作業を終えるのを待っていた。先に部室行けばいいのに、と思いながら、御端から寄せられる好意の空気がくすぐったくて、嫌ではなかった。
なにせ御端は、当初はひどい対人恐怖症だったのだ。原因は中学時代のイジメだろうが、ひとに嫌われることを極端に恐れて、返す言葉は途切れ途切れで（あ、これは今もそんなに変わらないか）、おまけに目が合わない。そんな御端が、こうして誰かを待って一緒に部活へ行こうとするっていうことは、なかなかの成長だと思う。
人間、懐かれて嫌な気分になるやつはあんまいないだろう。

「あれ……井澄くん、怪我……？」

見ると、御端の視線は俺の両手に固定されていた。手のひらの傷自体は大して見えていないが、絆創膏の端が横にはみ出している。

「ん？　ああ。ちょっとな……昨日の帰り、自転車ですっ転んでさ」
「えぇ！？　だ、大丈夫！？」
「へーきへーき。こんくらいなんともねーって」

なんでお前のほうが痛くて泣きそうな顔してんだよ。
御端の顔があんまりにも情けなくて、だから俺はなおさら笑顔で絆創膏だらけの手を振って見せた。

「ほ、ほんとに？　ほんとにへーき……？」
「おう。御端、手出してみ？」
「う、うん……？」

不思議そうに、だけど素直に両手を差し出してきた御端。俺はなに食わぬ顔でそのタコだらけの手に両手を伸ばし、ぎゅう、と力いっぱい握りしめてやった。「い！？」と御端が痛そうに声を上げ、俺は成功した悪戯に笑った。

「い、痛いよ、井澄くんっ……」
「ははっ、悪い悪い！　でもほら、御端が痛がるくらいには平気で物握れるしさ」
「う、うん。よかった！」

一転して、御端は笑顔。俺の怪我が大したことないってわかって安心したらしい。
……ま、ちょっとぴりぴりすっけどな。部活は体作りのメニューがメインだから、支障出るほどのもんでもないだろ。

「うっし。行くか」
「うん！」

自転車をロックし終えたので、御端と一緒に部室を目指す。途中、ふと気になって、聞いてみた。

「なぁ、御端。昨日の帰りさ、俺と別れてから、変な音聞いたりしなかったか？」
「へ、へん、な？」
「ずしんっつーか、どしんっつーか……ええと、すっげー重たいなにかが歩くみたいなさ」
「う、んと……なかったと、思う、けど……？」

少し自信なさげに、ふるふると首を振る御端。

……ま、あれは御端と分かれただいぶ後だしな。

「だよな。悪い、なんでもねぇ。気にしないで」

「う、うん……？」

不思議そうな御端にそれ以上のフォローはしないで、俺たちは部室に入った。部室の中には真嶋や仲町もいて、一応真嶋にも御端に聞いたこととまったく同じことを聞いてみたけれど、返事は御端と大差なかった。仲町には聞かなかった。こいつは俺らとは家の方向がまったくの逆だから、聞く意味がない。

しつこく「なんで？　なんで？」と食い下がる真嶋と仲町に「うっせぇなんでもねぇっつってんだろ！」と返して、俺たちはグラウンドに駆け込んだ。体のあっちこっちが鈍い痛みを訴えてきたけど、無視できるレベルだ。

……残ったのは体の傷と痛みだけ、か。

02　謎の少女の正体

一週間ってのが案外あっさり過ぎていくものだということは知っていた。そして今、改めてそれを実感している。

この一週間、一日一日のサイクルに大きな変化はなかった。俺の一日と言えば、朝起きて、飯食って、学校行って、朝練して、授業受けて、飯食って、ちょっと寝て、授業受けて、部活して、コンビニ寄って買い食いして、他愛ない話をしながらみんなで自転車を押して歩いて帰る。土日も挟んだから授業なしで一日部活に励んだ日も二日あるけど、それも以前となんら変わらない。

そんなふうに、一週間が経過した。

その間、あの日の女は一度も姿を見せていない。両手の傷は薄くなっちまってもうわからないくらいだけど、背中はまだ鈍く痛む。まだ、消えていない。

今日まで何度も考えた。あれは本当に現実だったんだろうか。それともやっぱり夢だったんだろうか。けれど、上手く答えは出ない。

どっちかっていうと現実の線が濃厚だけどな。傷だけとはいえ、証拠が残ってたわけだし。

ぬっと、唐突に視界いっぱいに御端の顔が入り込んだ。俺はパックジュースのストローを口に含んだままごくんと喉を鳴らしながら、目を丸くした。

お、おおお、びっくりした。そういや今昼休みだったんだっけ。

「なんだ？　御端」

なんとか平静を装って、首を曲げて俺の顔を、困ったような、戸惑ったような顔をして覗き込んできている御端に声をかけてみる。

「え、と……どうかしたのかな……って」

「ん？　なんでだ？」
「なんか、元気、なく、みえる……」
自信なさそうに告げる御端に、俺は内心苦笑した。御端に心配かけるとか、なにやってんだ俺。
御端はちょっと（いや、だいぶ……？）天然入ってるけど、負の感情についてはなかなか敏感だ。主には相手が気を悪くしてないかどうかというところが焦点になるが。言い方を変えれば、相手の顔色を窺っている、ということだ。これもやっぱイジメが原因なんかなー。
ストローを離して、頬杖をついて笑ってみる。
「そっか？　まーちょっと寝不足だからな。そのせいかも」
「寝不足……？」
「おお。化け物に襲われる夢見てさ」
「ば、ばけもの！？」
いちいち律儀にいい反応をする御端に笑みが深くなる。こう、からかって遊びたくなるタイプだよな、御端って。もうちょっと怖がらせるのも面白いかもしれない、と少しばかり思ったりもするが、後のフォローが面倒なのでそれはしない。
「そ。ま、ちゃーんと倒すけどな」
「や、やっつけたの？」
「おお」
「す、すごい！　井澄くん、強いんだね！」
夢の話ってことになってんのに、御端はそれが現実のことのようにキラキラしたまなざしを俺に向ける。……ちょっと気恥ずかしい感じもするけど、楽しそうな御端の反応に満足して、中断していた

昼飯を再開する。御端も安心したのか、つられて再開する。俺が元気ないんじゃないかと心配していたことすら、なかったことみたいだ。面倒なとこもあるけど、簡単なところもあって助かる。

そういや真嶋は……と、部活でもクラスでも一番騒がしいやつの姿を探すと、石橋と笑いながらパンを食っていた。

石橋も俺たちのクラスメートで、出席番号の関係から野球部以外で入学当初からよく話をしていた。最初の頃は俺と石橋で会話していることが多かったが、気がつくと真嶋と石橋で話をしていることが多くなっていた。妙にウマが合うらしい。多少の寂しさみたいなものはあったが、まあそのおかげで俺と御端は落ち着いて昼飯が食えるようになったわけだから、プラマイゼロ、結果オーライだ。

今も、でっかい笑い声が聞こえてくる。また馬鹿な話してんな、あいつら。さすがにここでエロ話するほど馬鹿じゃないだろうけど。

空になった弁当箱のフタを閉めて、購買で買ってきたパンを手に取り、封を切る。そして、出てきた焼きそばパンに齧り付い――

「よっく食べるなー。野球部の練習ってそんなキツイの？」

……声が、聞こえた。すぐそこから。

どっかで聞いたことがあるような、気がしなくもないけど。どうにも声の主の姿が思い浮かべることができず、首を回して机の横を見た。斜め右下、スカートだっていうのに気にした様子もなくしゃがみ込んで机に手をかけてこっちを見ている女子が一人。

……誰だ？

肩につくかつかないかという長さで、ゆるくくせのついた髪の毛。下から覗き込んでくる大きな瞳はどこかいたずら好きそうな光を抱えている。

どっかで見た……気がしなくもないが、名前が出てこない。記憶力はそんなに悪くないはずなんだけどな、とぼんやり眺めていると、相手が楽しそうに小さな声で笑った。

「うーん、やっぱわかんないか。あの時は結構暗かったからね」

そう言って、相手はどこからかキャスケットを持ち出して、すっぽりとそれを被った。そして、キャスケットの影から瞳を覗かせ、俺を見上げる。

唐突に、記憶がフラッシュバックする。

驚愕と衝撃で勢いよく腰が浮いた。イスががたんと大きな音を立てるが、気にしていられない。目を丸くして、なにか言おうと口が動くが、うまく言葉にならない。そんな俺を見上げ、女は満足そうな笑みをキャスケットに下で浮かべた。

「や、一週間ぶり。元気そうだね」

間違いない。こいつは一週間前のあの女だ。魔法の杖みたいなもんを持って、魔法みたいなもんを使って、狼のようで狼じゃない黒い獣と戦った、あの女。

「お、ま……！？　なん……！？」

「おー、いい驚きっぷり」

ようやく声が出たが、しかし意味のある言葉にはなりそこなった。そんな無様な俺の姿を、女は楽しそうに眺めている。

ふと、横と背後から視線を感じた。

横にいる御端は最初から俺と話をしていたからしかたがない。御端の場合、気になるといっても身を乗り出してくるほど積極性がないから害はほとんどない。が、石橋と馬鹿話に花を咲かせていたはずの真嶋まで興味津々かつ無遠慮にこちらを覗いてくる。おまけに石橋まで一緒になって。だれ、だれ、と面白がるのがものすっげーうざい。

「お前らちょっと黙ってろ！」
「えー、なんだよー」
俺が怒鳴っても、真嶋も石橋も気にしない。驚いてビクついたのは御端で、苦笑したのは問題の女だった。
「あー、悪いね。今日は顔見に来ただけだから。井澄くん、明日ミーティングのみで早い日でしょ？　話はその後にしよう」
「……なんで明日がミーティングの日って知ってんだよ……」
「だってうちのクラスにもいるもん、野球部」
驚く俺を尻目に女は立ち上がり、体を反転させながら、しかし顔だけはこっちに向けたままで、にんまりと笑みを浮かべて言う。
「一年一組の城井灯子。またね、井澄くん」
そうして、楽しそうに一年九組から遠ざかる女の姿を見送った。
俺も御端も呆気にとられ、動くという選択肢を数秒の間忘れ去っていた。俺でもわけがわからないから、御端はもっとわけがわからないだろう。
とりあえず、あいつが俺の部活（そういや名前も呼ばれてたか）を知っていた理由はわかった。まさか同じ学校だったとは……。一組、っつーと、たしかに野球部の仲間がいる。林田と葉狩だ。それならたしかに、部活の予定の大まかなところは流れててもおかしくない。
……いや、待て待て。やっぱおかしいって。一組の女がなんで九組の俺のことなんか知ってんだよ。一組と二組とか、九組と十組ってんならまだしも、一組と九組じゃ接点なさすぎじゃねーか。後で調べたってんならまだしも、事前にとか……ないだろ。ナイナイ。

まさか、全校生徒把握してるなんて漫画みたいな設定じゃねーよな。だとしたら引く。……そうじゃなかったとしたら、俺はあの事件に遭遇する前から、あの女となんらかの関わりがあったってことになる。俺のほうはまったく覚えがないんだが。

「井澄の友達かー？」
「なんか変わった子だな」

真嶋の質問には答えず、石橋の感想には胸中で同意し、俺はあきらめのため息を吐き出し、席について昼飯を再開する。真嶋と石橋は少しつまらなそうに、こちらもやはり昼飯を食べ出す。御端がしばらくきょときょとと俺を見たり廊下を見たり真嶋や石橋を見たりと忙しかったが、そのうち落ち着いて弁当のおかずを口に運び出した。

焼きそばパンをすべて胃の中におさめると、もう一回ため息をつきたくなった。

……あいつと俺の関係なんて、俺のほうが聞きたいくらいだっつーの。

03　ファンタジー

件の女――城井が俺に再度直接コンタクトを取ってくることはなく、変わったことはひとつもないまま部活のミーティングが終了した。

もしかして忘れられたのだろうか、とちらりと考えながら、真嶋や御端とともに自転車の元へ向かうと、自転車のかごに張り紙がされていた。「屋上にて待つ」と書かれている。差出人の記載はなし。しかし、こんなことをするやつの心当たりが他にない。タイミングもばっちりだ。

普通に言いに来いっていうか最初に言え、あの馬鹿。

にしても、よく俺の自転車覚えてたな、あいつ……。

脱力しつつも妙に感心して立ち尽くしていると、両脇から真嶋と御端が覗き込んできた。

「あ、昨日の、城井ってやつか！？」

「屋上、だって」

「……ちょっと行ってくるわ。じゃ、また明日な」

「おー！　がんばれよー！」

「が、がんば、って……？」

なにをだよ。

真嶋の意味がわからないエールと、御端自身よくわかっていないらしいエールを背中に受けながら、屋上を目指す。

まだ日が暮れていない、うっすら橙色と紫色に染まりつつある校舎の中を歩くと、どういった理由があったのか知らないが居残っていた見覚えのない女子二人とすれ違った。楽しそうに話をして通り過ぎていく彼女らに視線を向けたのは一瞬で、その一瞬にも足が止まることはなかった。

昼間の喧騒が嘘のような廊下を歩いていると、ふと不思議な気分がじわりと滲み出し、しみこんでくる。こんな時間に校舎の中を一人で歩くのは初めてかもしれない。大抵は外で部活にいそしんでいる時間だし、ミーティングだけの日はそのまま家に帰るし、そもそも校内で一人で行動することが少ない。いつも過ごしている空間なはずなのに、まったく別の場所にいるような錯覚がどこからか湧き上がってくる。

どこかふわふわとした心地で階段を上りきり、屋上へと繋がるドアの前で立ち止まる。

隔てるものはドア一つ。だというのに、気持ちは一転、妙に引き締まる。

この向こうは、別の世界だ。さっきまでの錯覚なんて目じゃない。夢だったんじゃないかと思うような出来事。なのに、あの記憶の中の登場人物が昨日、俺の目の前に改めて現れた。そいつは、「話をしよう」と俺を誘った。その話の内容は、やっぱり一週間前の出来事についてなのだろう。それ以外に、俺とあいつに間には、なにもないんだから。

ここで、屋上のドアに背を向けて、その権利を放棄することもできる。城井灯子と名乗った女は、「話をしよう」とは言ったけれど、そこに強制の響きはなかった。「絶対来い」とは言われなかった。あの夜、大怪我をしながらも俺に「逃げろ」と言ったあいつは、多分、俺が誘いに乗らなくても構わないと思っている。あいつの「話をしよう」っていうのはつまり、話を聞きたいなら話す、聞きたくないなら聞かなくていい……そういうことなんだと思う。

選択権は俺の手にある。

右手を開いて、見つめて、拳を握る。なにもない手のひらに、あの日握った剣の感触がよみがえる。そして、城井が俺に杖を向けて言葉を紡いでいた間、誰かがなにかを言っていたような気がした、ということを思い出した。あれはいったい誰なのか。なにを言っていたのか。俺に、なにを伝えたかったのか。

「……うっし」

覚悟は数秒で決まった。

俺は拳をほどき、手を前方のドアノブへと伸ばし、軽く捻る。屋上のドアはなんの抵抗もなく開いた。途端、冷えた風が隙間から流れ出てきた。それでもドアを閉めることなく、完全に開け切ってしまう。

屋上への出入りを禁止する学校も多いらしいが、うちの学校では基本的に開放されている。落下防止に背の高いフェンスが外周に沿って隙間なく並んでいて、ベンチも四つほど設置されている。昼休みなんかはここで弁当を食べる生徒で結構にぎわっていて、俺も御端や真嶋と一緒に、時折だがその中に混じることがあった。寒くなってきてからは近寄ってもなかったけどな。

そういえば、放課後の屋上に足を踏み入れたのは初めてだ。

屋上は見晴らしがよく、風も非常に気持ちいいのだが、屋外だ。当然夏は暑くて冬は寒い。演劇部なんかが時折ここで発声練習したりしているらしいが、ここ数日で急激に秋から冬へと移り変わってきたため、好き好んで屋上に来る生徒の数は激減したことだろう。

屋上に出てすぐに、城井の姿を発見できた。城井は校庭とは反対方面のフェンスに背中を預けて座り込んでいて、俺に気づくと、「や」と簡単な挨拶をしてきた。俺はそれに答えず、城井に近づいて、その真正面に立った。そんな俺の態度に、城井は気を悪くした様子を少しも見せず、へらりと笑って見せた。

「いやー、悪いね、こんなに遅くなって。本当はもっと早く話ができたらよかったんだけど。昨日やっとこさ普通に学校に来れるくらいに回復してさ。その後、怪我の具合はどう？」

「もうほとんど平気だ。……そっちこそ、あの時の怪我、もういいのか？」

城井が回復だなんだと言っているのは、おそらく……どころか確実に一週間ほど前の事件で負った傷についてだ。
あの後、俺に意識はなかったんだから、こいつは一人であの場の後始末をして帰宅したことになる。戦闘の痕跡を消し、俺と俺の自転車を俺の自宅まで運んだ。どうやってかは知らないが、少なくともそれだけのことはしたはずだ。それを考えると、ものすごく申し訳ない気持ちになる。怪我人（しかも重傷の女）になにさせてんだよ、俺。
沈む俺とは裏腹に、城井はなんてことないように言う。
「《ウィザード》の力を使ってる間は回復が早くなるからね。もう日常生活にはなんの支障もないよ」
「……《ウィザード》？」
聞きなれない単語を繰り返してみる。
「うん、暫定的にね、そう呼んでるの。《魔術師》だから、《ウィザード》」
「……魔術師ときたかよ」
ため息をついた俺に、城井はきょとんとした。ものすごく不思議そうだけど、お前の言ってることのほうが俺には不思議だ。
「え。なにその反応」
「なにって。突然魔術師だなんだって言われてもわけわかんねーよ、普通に。だいたい、こないだのあれはなんなんだよ。ちゃんと説明してくれんだろーな？」
「……え、あれ？　ちょ、ちょっと待ってよ？　あの……あの、さ……《ナイト》の記憶、見てない？」

「なに言ってるかさっぱりなんだけど。なんだよ、《ナイト》って」
言い返せば城井はますます困惑した顔をする。記憶って言われたって、なんのことかさっぱりわからない。
……ん、待てよ？
「……そういや、変な夢は見た気がするな」
「どんな！？」
「なんか、女の子がいて……えーっと、なんか守ってやる、みたいな決意した気がする。そんだけ」
「あちゃー……そうきたかー」
俺の問いに対する答えを聞き、城井は頭を抱えた。
なんだってんだ、いったい。
「ってことは一から私が説明しなきゃなのか。うーん、どっから話したもんかなぁ」
なにやら考えているようなので、城井から言葉が出るのを待とうかとも考えた。けど、迷ってるならまず俺の疑問に答えてほしい。一週間前からずっと、もやもやしたものが頭の中をぐるぐる回って、少し気持ち悪いし、どうにも落ち着かない。なんていうか、魚の小骨が喉に引っかかったまんまとれない感じ。
「なあ、じゃあとりあえず俺の質問に答えてくんね？」
「内容による」
「俺、あの晩家に帰った記憶ねーんだけど。もしかしなくても俺のこと家まで運んだのか？」
「うん」

あっさり肯定が返ってきた。
じっと城井を観察する。どう見ても標準以上に筋肉がついているようには見えない。今は城井が座り込んでいるのでわからないが、あの夜の記憶がたしかなら背は俺より低いはずだし、上半身は制服やコートに隠れて見えないがスカートから伸びる足は明らかに華奢としか言えない。隠れている腕も似たようなものだろう。俺や自転車を担いで運んだと考えるのは、かなり無理がある。

「《魔術》ってやつでか？」
「お、魔法とは言わないんだね」
「《魔術師》なんだろ？」
「うん。まあ、その辺の明確な定義はないから、同義と考えてもらってもいいんだけどね」

城井はそう言うが、《魔術師》の業なんだから、《魔術》って言うほうがしっくりくる。

「やっぱそうか。具体的には、どうやったんだ？」
「ちょっと《風》を使ってね、君の部屋の窓の鍵をちょいと開けて、直接放り込ませていただきました」
「……待て。お前なんで俺の部屋の位置知ってんだよ」
「秘密！」
「おいこら！」
「冗談だって。後で教えてあげるから、今は置いといてよ」

先日の一件からわかっていることだが、こいつは相当頑固だ。「言わない」と言ったらマジで言わない。今はこの件についてはこれ以上追及しても無駄だろうな。
ため息をついて、次の質問へ移ることにする。

「……じゃあ、おふくろの記憶は？　おふくろ、俺は帰ってきてそのまま部屋行っちまったって記憶してたんだけど。しかも俺が買った牛乳受け取ったことになってっし。……まさか、記憶いじったのか？」
「そんな複雑なことしないよー。ちょっと暗示をかけただけ」
「暗示……？」

そういや、俺に対しても最初はなんかそんなよーなこと言ってたな。

「そそ。実際は違うのに、まるでそうであったかのように錯覚させるの。……催眠術みたいなもんだね。わざわざそこまでするべきかどうかは迷ったんだけど……」
「なんだよ？」
「……顔、見られちゃって」
「……」
「自転車とかさ、やっぱ音するじゃん。それで、井澄くんのおばさんが出てきちゃったんだよね。『孝弘ー、牛乳買えたー？』って。いやさすがに焦ったわー」
「そうかよ……」

そうは言うが、緊張感の類はまるで感じられない。本人は「迷った」なんて言っているが、もしかしたら最初からいくらかはそのつもりでいた可能性もある。暗示かけなきゃ、おふくろが知らない間に俺が帰って部屋に戻ったことになっちまうからな。靴も俺の部屋にあったし。

自転車といえば……。

「そういや、俺の自転車、壊れてたはずだと思ったけど。俺の記憶違いか？」

「曲がってるのは直したよ」
ストレートな返答じゃなかったけど、つまり壊れてたんだな、やっぱ。で、直してくれたんだな、やっぱ。
「そっか。サンキュ」
「いえいえー。……物は直せるんだけどねー。体の傷は無理だったから。背中とか、まだ痛いんじゃない？　ごめんね」
「いや、こんくらいはどーってことない。ま、着替えには気を遣ってるけどな。ばれた時の言いわけめんどうだし」
「そっか……いやでも、背中は確実に私のせいだしね。ほんとごめんね」
「もーいいって。じゃ、次な。……あの狼みたいなのはなんだったんだ？」
城井が一瞬目を瞠って、くしゃりと苦笑した。
「……ずいぶん遠回りしたねー」
「でかいの先に聞くと、ちっさいのは聞くの忘れちまいそうだしな」
「なるほど、正論だね」
城井は暢気に笑って頷いて、
「あれは《魔獣》ってやつ」
ファンタジーな単語を飛ばした。
……いや、《魔術師》とか《魔術》とか出てきた時点で充分ファンタジーだったけどな！

０４　異世界の話

一瞬思考がフリーズ状態になったが、でかいため息をついて目の前の現実に立ち戻る。
まあ、そもそもだ。
こいつのやることなすこと言うこと、最初からかなりファンタジー要素を含んでいるわけだから、こいつが言う分にはその単語はなにもおかしくない。
……ということになるのか？　それでいいのか？　……いいや、考えたってわかんねーし。

「……この世には不思議なものが存在したんだな……」
「いや、この世界のものじゃないんだけどね」
「……は？」
「あれ、《異世界》のものだから」
「……《異世界》？」
「イエス。《異世界》」

あまり聞き覚えのない単語が示す意味を、混乱する頭の中から引っ張り出す。
え、っと。それって、あれか？　この世界とは別の世界がもう一つあるとかっていうやつだよ、な？
え、あんの？　そんなのマジであんの！？
困惑する俺とは反対に、城井は納得顔で一人頷く。

「そうだな……やっぱそこからだよね。井澄くん、異世界の存在って考えたことある？」
「ない」
「うん、だよね。じゃあまず異世界が存在するっていう前提を頭の

中に用意して」
「強制かよ」
「じゃなきゃ話が始まんないんだよ。用意できた？　できたら、その異世界では魔術とかそういう不思議な力が一般的に存在するファンタジーな世界だって設定を書き加えてね。これ大前提ね」
「……はいはい、と」

反抗しても仕方がないので、言われるままに脳内のイメージに情報を書き足していく。

「私も井澄くんも、自分の魂の内側に、その異世界のひとの魂を包有してるんだよ」
「……は？」
「包有っていうか、融合に近いかなぁ。とにかく、私たちの中には、もうひとり分、別のひとの魂が眠ってるの」

突飛すぎだ。なんで一つの体に魂が二つあるんだ。しかも異世界の人間の魂って。
疑問ばかりが出てきて、それをまとめることもできず言葉なく立ち尽くしていると、城井はそのまま勝手に話を続ける。

「今から十一年くらい前、になるのかな。その異世界から《こっち》にやってきた一人の魔術師がいてね。その魔術師は二つの魂をこの世界に持ち込んだの。で、その二つの魂を波長があった二人の人間にそれぞれ融合させて、最後には魔術師自身も波長の合う人間と融合した。その融合した人間っていうのが、一人は私ね」
「……《ウィザード》か」
「そ。……元は人間だから当然ちゃんと名前があるけど、もう私の一部だからね。なんかさ、その名前で呼ぶと、一つの体を二つの魂が共有してるみたいだなって思って、なんとなく落ち着かなくって。

私と融合した魂は魔術師のものだから《ウィザード》。で、井澄くんと融合してる魂は騎士……正確には見習いなんだけど……まあ、だから私は《ナイト》って呼ばせてもらってる」
「なるほどな。じゃあ俺もそれで呼ぶことにする」

別の人間の魂だって言葉にするのは面倒だが、なにか固定で呼び名があれば少しはそれも軽減する。俺は、俺と融合したっていう魂の元の名前を知らないし、別にそれを知りたいとも思わないから、城井の案に乗っかろうと思った。城井は「お好きにどうぞ」と笑った。

「で、『融合しました』……だけで話が済めばよかったんだけど、そうもいかなくなったの。どうも《ウィザード》たちがいた世界から《こっち》に追っ手が来ちゃってさ。井澄くんが遭遇した狼みたいなのはそれなんだよ」
「追っ手、って……《ウィザード》たちは犯罪者かなにかだったのか？」

魂となって、別の世界に逃げ込んでも、追っ手がつくほどに悪いやつだったのだろうか。でも、俺の中にある魂は《ナイト》、騎士（見習いらしいけど）だった人間の魂だって話だ。なんだか違和感のある仮説だった。騎士と呼ばれる人間が全員善人かっつーとそれも違う気がするが。もっと単純に、自分の中にあるっていう魂が悪人のものだったとは思いたくないだけなのかもしれない。
それに応えるように、城井はふるり、と首を横に振った。

「《ウィザード》の記憶を検証してみたりもしたけど、どうにもそうじゃないみたいなんだよね。むしろ追ってくるのが悪い奴かな、みたいな感じ」
「じゃあ、俺たちのほうが正義なのか？」

「正義なんて言葉じゃ魂は計れないよ。ただ、《ウィザード》たちは積極的に、追われるようなことをしたわけじゃないってだけ。……あ、いや、《ウィザード》はしたかな」
「したのかよ！　なにしたんだ一体！」
「《あっち》の法律違反をちょいとね。よくて投獄、最悪死刑って程度には犯罪したんだよ」
「ちょっとじゃねーだろそれ！」

城井は笑って視線を俺からずらし、空を見上げた。

「でも多分、追っ手がついた理由は、《ウィザード》じゃないよ。だって、法律違反程度で異世界まで追っかけてくるわけないもん。《ナイト》でもないよ。まー、こう言っちゃうのはなんだけど、ぶっちゃけた話、《ナイト》はこの件に関しては完全に純粋に巻き込まれただけの存在だから」
「……あー……そういや、《ウィザード》がこっちに持ち込んだ魂は二つなんだったか。一つが《ナイト》……ってことは、他にもう一つあるわけだな」
「そう。あいつらはそのもう一つの魂を探してるはずなの。つまりだ、一週間前の狼みたいなのは、追っ手は追っ手でも、探索用に放たれたものなんだよ」
「探索用、ね……。それにしちゃずいぶん凶暴そうだったけど。んで、なんでそのもう一つの魂は狙われてんだ？」
「《特別な魂》だから、かな」

狙われているらしい魂のことを、「特別」と城井は説明した。その特別がどう特別なのか、どのくらい特別なのかわからなくて、俺は続きをじっと待つ。城井も俺の態度をよしとし、閉じた口を再度開いた。

「《ウィザード》たちが住んでた《あっち》の国には、そこを統べる王様がいるの。その国と王様の一族は、《神に愛されてる》って言われてて、世界中のひとが王様を崇めてる……って言うと大げさかな。《ウィザード》はそうでもなかったし。でも、国と王様の一族を神聖視する人はたしかにいたよ。そういう国教だしね。で、その王様の一族っていうのは、魔術師じゃできないような不思議なことを実現する《力》があってね。……例えば、そうだな……王様だったら、この学校をもう一つ作ることができる、かな」

「……は？」

「ゼロから作るんじゃなくて、コピーするってことなんだけどね。そっくりそのままコピーできちゃうの。そんなこと、最高位の魔術師にだってできないよ。コピーすること自体は可能だけど、それはあくまで幻の一種でしかない。コピーしたものは幻じゃなく、現実になるんだ。……こんなんでわかるかなー。説明って案外難しい」

「えーっと、つまり魔術師がコピーしたものはほっときゃいずれ消えるけど、王様がコピーしたものは物理的に壊さない限りなくならないって感じか？」

「そうそう！　やー、井澄くんは理解能力高くて助かるわー。御端くんの保護者やってるだけあるね！」

「御端は関係ねーだろ！」

ようやく俺に視線を戻した城井の口から無関係の御端の名前が出たことで、俺が顔をゆがめても、城井は楽しげに笑うだけだった。

……そりゃまあたしかに、御端は話す内容が前後してたり単語になったり足りてなかったりして普通よりなに言ってるかわかりづらいこともあるけど、御端の言いたいこと理解するために勉強よりもよっぽど頭つかったりもするけど、この場にはあんまり関係ないと思う。あと、それ言うなら真嶋のがずっと理解能力高いと思う。

「で、だ。王様の一族ってのはみんな例外なく、そんな感じで魔術師では実現できないことができちゃう不思議な力……《奇跡の力》を持ってるの。その内容はひとそれぞれ違うんだけどね。……だから、王様の一族の魂は特別視されてるの」
「存在が特別視されんのはわかるけど、魂がってのはよくわかんねーな。具体的には？」
「王族の者の魂を食らえば、その能力を手に入れ、寿命が百年延びる、とかって伝説があるみたいね」
「……」
「それが真実かはわかんないんだけどさ。《ウィザード》はその伝説に興味ないみたいで、調べようともしなかったみたいだから」
「……ちょっと、ちょっと待て。魂って食えるもんなのか？」
「食べれるみたいだよ。《ウィザード》もちゃんとした方法は知らなかったけど。もちろん魔術的な方法になるから、《こっち》の人間には無理なんだけどね。魂を取り出せて、魂を捕獲できて、魂を保管できて、食べることもできる。《あっち》はそういう世界ってことだね」
「うげー……」

考えれば考えるほど、気持ちの悪い世界だ。魂だなんだと言われても、見たこともないのだから現実味はない。それでも、城井が最初に言ったとおり、これはただの前提の話だ。前提であることを認めなければ、話は進まない。俺は仕方なく、それを前提として飲み込んでいく。
「で、《ウィザード》が持ち込んだもう一つの魂が、その王族のものだったのか」
話の筋からすれば、そういうことだろう。
確認をとると、城井はにっこり笑った。

「当時の国王様の末娘。《ウィザード》は《姫》って呼んでた。だから私も、その魂のことを《姫》って呼んでる」
「《姫》だけ英語じゃねぇんだな」
「だって、《ウィザード》はずっとそう呼んでたんだもん。今更(プリンセス)って呼ぶのもなんかね。長くなるし」
「おい、それ言ったら《ナイト》はどーなんだよ」

《騎士》より《ナイト》のが一文字多い気がすんだけど。

「ん？　《騎士》って呼んだほうがいい？」
「……や、《ナイト》でいい」

城井から目を逸らして答える。
思いつきでツッコミを入れてはみたものの、実際呼ばれてみると激しく微妙だった。《ウィザード》も、《魔術師》よりか言いやすいしな。
《ウィザード》、《ナイト》、そして《姫》。問題の魂の呼び方はこれで固定してしまうのがいいだろう。

「……一応確認させてくれ。城井は《姫》じゃねーんだよな？」
「私は《ウィザード》だって言ったじゃん。なによ、《姫》のがよかった？」
「いや、もし城井が《姫》だったら間違いなく俺のプライドが潰れる」
「あー……」

だって俺、よくわかんねーけど、とりあえず《ナイト》だってんだぜ？
《ナイト》が《姫》に守られるだなんて、笑い話にしかなんねー

し、当事者としては情けなさマックスだ。ただでさえ女に守られてがっくりきてんのに。城井が《ウィザード》だってことで、ちょっと救われた気分だ。……いや、女に守られた事実は変わんねーんだけどさ。

話を元に戻そう。城井が一週間前戦ってたあの狼みたいなのは《姫》の魂を探している、らしい。城井があの狼みたいなのと戦っている、ということは、だ。

「……じゃあ城井がああやって戦ってんのは、その《姫》を守るためか？」

「んー、まあそれだけじゃないんけど。でも、とりあえずそれが一番の理由かな」

「そいつ、知り合いなのか？」

「二年前に一回だけ会って話はしたけどね。向こうは覚えてないはずだよ」

「なんで」

「忘れるように暗示かけたから」

「……なんで」

「知らないほうがいいことってのが世の中にはあるのですよ。そうは思わない？　井澄くん」

「……思う」

今、まさに、実感してるさこのやろー。

「でも、最近また顔を合わせたから、名前と顔くらいは覚えてくれたんじゃないかなーと小さく期待してる」

「……なのに、怪我してまで、戦うのか？」

問いかければ、俺の胸のうちを理解したようで、城井は苦笑した。

……いや、違う。寂しげに、笑った。

「《姫》の融合者が私のこと知ってるか知らないか、覚えてるか覚えてないかは重要じゃないよ。私がただ、《あの子》を守りたいの。《あの子》には、笑っていてほしいの。……私にとってはね、《あの子》を守る理由なんて、それだけで事足りるんだよ」

正直なところ、城井がそこにどんな想いを込めてるのかなんてこと、俺にはさっぱりわからない。嘘か本当か、それすらもわからない。

ただ、それは、その答えは……今城井が浮かべている笑顔と同じで、すごく寂しいものなんじゃないだろうか、と思うだけだった。

「あと、一応言っておくとね。私は別に井澄くんに『一緒に戦って欲しい』なんて言うつもりはないから」

それは、改めて言われてなくてもわかっていたことだ。強要するつもりがあるなら、城井は最初から、俺に逃げ道なんて用意したりしなかっただろう。

俺が黙っていると、城井はそのまま続けた。

「井澄くんには井澄くんの生活があるもんね。部活も大変そうだし。あの狼みたいなのは、油断さえしなければ私ひとりでも大丈夫だし。……あー……この間のは、なんというか……井澄くんには目撃されちゃうわ、私は思いっきり負傷しちゃうわで、まあ、うっかり井澄くんの中の《ナイト》をたたき起こしちゃったんだよ。うっかり」

ものすごく「うっかり」を強調された。言い訳がましいとも感じられるが、城井としては本気でそう思っているのだろう。それでも、今更だ。その気持ちが顔に出たのか、城井の表情が苦笑へと変わる。

「こうなっちゃうと、本当に今更なんだけどね。私はさ、《ナイト》を起こすつもりなんて、なかったんだよ」

それを嘘だとは言わない。

しかし、城井は《ナイト》を起こしてしまった。不測の事態が重なった結果とはいえ、それは事実に変わりない。

自分の中にもうひとり誰かがいる。……いや、魂だけが、俺の中でひっそりと息づいているのだ。そう考えても実感はちっとも湧いてこないのに、小さな納得があった。あの時、なにを言っているかはわからなかったが、たしかになにかを言っていたと思われる声は、きっと《ナイト》のものだったんだろう。

なにを、言っていたのだろう。俺になにかを伝えたかったんだろうか。それとも、ただ、意味なく声を上げていただけなのか。それすら定かにはならない。どんなに耳を澄ませても、言葉なんて聞き取れやしないのだ。

「あのさ、城井……《ウィザード》はお前に、なんか言ったりしたか？　お前には、内側の、《ウィザード》の声が、聞こえるのか？」

尋ねると、城井はきょとんとしてこっちを見上げてきた。もういくつか言葉を重ねるべきかと思ったときには、城井は答えを出していた。

「声……は、聞こえないなぁ。井澄くんは聞こえるの？」

「……わかんね。なんか言ってたような気がすんだけど……なに言ってんのかは、全然聞こえなかったんだ」

素直に答えれば、城井は腕を組んで数秒考え込み、そのままのポーズで言う。

「未練、かもね」
「未練？」
「あんま、いい死に方じゃなかったからね。……《ナイト》に限らず、だけど」
「……そうなのか？」
「ん。《ナイト》は《魔獣》に殺されて、《姫》は自殺だったよ」

端的に死に様を告げられて、それ以上追求する気にはなれなかった。この件については、あんまり深く聞いても、気分が悪くなるだけって予感がした。
……あれ、ちょっと待て。今ふと気づいたんだけど。
俺、知らなかっただけで、最初から関係者だったんじゃねーの、これ。

「……おい、城井」
「あれ？　声が低くなってるよ井澄くん」
「お前が最初から俺の名前知ってたのも、俺の所属知ってたのも、俺の家と俺の部屋の位置を知ってたのも……」
「……」
「最初から《ナイト》と融合した俺のことマークしてたからか！？」
「マークだなんて人聞きの悪い。勝手に変なことに巻き込まれてないか、時々確認してただけだよ」

心底心外そうな返答に、俺はがっくりと肩を落とした。

05　届かない言葉

ふいに、一際強く冷たい風が俺たちを巻き込むように通り過ぎた。俺と城井は揃って体を小さくし、互いに改めて顔を見合わせる。
無言の状態が十秒ほど続き、やがて小さく城井の口が動いた。

「……とりあえずのところは話したし、お開きにしよっか」
「だな……」

なにはともかく、寒ぃ！　コートをしっかり着込んでいるとはいえ、長時間じっとしているには、屋上は寒すぎだ。
城井が「よっせ」という声とともに腰を上げる。その動きは、どこかぎこちない。日常生活に支障がないレベルまで回復したとはいえ、まだ完全回復には至ってないだろうに。それでも城井は学校に来ていて。そんな怪我をしてまで《姫》を守ろうとする。
ひとりで。

「……なあ。俺、ほんとになんもしなくていいのか？」

思わず問いかけると、城井は心底不思議だと言わんばかりに目を丸くした。……なんかその反応、ちょっと腹立つ。俺がそういうこと言うのが意外だと言いたげに見える。
しかし、城井はすぐに表情を変えた。ふんわりと、優しい笑みを浮かべた。

「……井澄くんは優しいね」
「馬鹿、そういう問題じゃ……」
「井澄くんはそのままでいて。今のままで、いいんだよ」

言われている意味が、よくわからない。けれど、なんて返していいかもわからない。困っていると、ふふ、と城井が楽しげに笑った。なにが楽しいのか、俺にはわからない。

「そりゃ、協力してくれるっていうんなら助かるけどね。でも、この件について体と命を張れるほどの理由がないでしょ、井澄くんは」

「ずっぱり言うじゃん……」

あんまりな言い草にひくりと頬が引きつる。

でもたしかに、城井の言うとおりかもしれない。顔も名前も知らない相手のために戦ってやるなんて、俺には言えない。たとえ俺の中に《ナイト》の魂があるって言われたって、たとえ《ナイト》にとって《姫》が大事な存在だとしたって、それは《ナイト》の問題であって俺には関係がない。《ナイト》の想いは、俺にはわからない。《ナイト》は俺に伝えようとしているのかもしれないけど、それでも現状として、俺にはなにも届いていないんだ。

我ながら冷たい選択だとは思う。けれど、俺には俺の大事なものがある。

俺にとって今の日常はある意味《特別》なんだ。野球部の活動が楽しい。クラスメートの御端や真嶋と一緒にいると楽しい。第三者からしてみれば、大したことのない、取るに足りないただの日常かもしれない。でも俺にとって、大事なのは《姫》よりもそっちなんだ。

そんな俺の内心を見透かしたように、城井は強気そうに笑った。

「わかってるよ。だから気にすんな！」

俺の答えは決まっていて、それがなんだか居心地が悪い。答えが決まっている以上、先に立ち去るべきは俺なのに、その居心地の悪さから動けない。

それに気づいてか、城井のほうが先に動いた。

「時間、とらせてごめんね！」

城井は笑顔のまま、屋上のドアに向かう。だが、その足がふと止まり、俺を振り返った。

「あ、運動部の練習、終わるの早くなったって聞いたけど、野球部はどうなの？」

「あー、みたいだな。今日のミーティングで五時半までにするって言われた」

一週間ほど前に発生した猟奇殺人事件の、二人目の犠牲者が出たのだ。死体が発見されたのは二日前。犯人に繋がるような手がかりは現時点ではなにもないらしいが、死体の悲惨な有様から同一犯の所業であるというのが世間の見方だ。

二人目の犠牲者は、北上里駅の西方向一駅分離れた地域から出た。今回も目撃者はゼロ。犯人の目星はついていない。被害者の体のパーツはばらばらになっていて、教室の中で聞いた話じゃ足りないパーツもあるらしい、とのことだ。

一件目ではまだ他人事だったこちらの地域も、現場がすぐそこまで近づいたことで緊迫感が這い上がってきたのか、各運動部には学校側からしばらく部活を早めに切り上げるように通達があったらしい。その制限が、午後五時半まで。六時だともうとっくに暗くなっちまうような季節だから、それも仕方ないことだと思う。真嶋は相変わらず不満そうだった。御端は……うん、まあ、なんだ。あいつ基本ビビリだからな。

「そっか。じゃあできるだけ寄り道しないで、まっすぐ帰って。それから九時……や、八時半以降は外に出ないよう、周りにそれとな

ーく言っといてくんない？」
「は？」
「あの狼みたいなのって夜行性……とは微妙に違うかもしんないけど。とにかく日中には動かなくてさ。基本的には夜九時過ぎから翌朝三時くらいまで、たまーに九時前からだったりするんだけど、そのあたりが活動時間っぽいんだよね。だから、八時半までには家に入っててくれると、無関係の人巻き込む可能性少なくなんの」
「ふぅん……」
「あと、一応私がなんとかするつもりではいるけど、もしまた襲われるようなら遠慮なく迎撃してね」
「って、あの剣使って、ってことか？　あれどうやって出すんだよ？」
「ああ……そっか、わかんないよねそりゃ」

気が回らなかったことらしく、城井は今気づいた風に呟き、俺に向き直った。

「見ててね。……《アリオ》」

城井が右手を俺のほうに突き出して短く唱えると同時に、その右手にどこからか光が集まっていき、凝縮し、それが杖の形になる。

「《デリオ》」

そして、城井の右手に現れたはずの杖は、その言葉によって消失した。思わず「おー」と感嘆の声を上げる。ぱっと城井が両手を開いて俺に見せてきた。

「と、まあ、こんな感じ」
「さっきの、呪文ってやつか？」

「うん。基本的には、イメージすれば唱えなくても出てくるんだけど……慣れてないと逆に時間かかるから、呪文唱えたほうが簡単だよ。呪文にはちゃんと意味があって、力があるから」
「その呪文、どういう意味なんだ？」
「《あっち》の古代語で、《アリオ》は《現れる》、《デリオ》は《消える》って意味。魔術における命名規則でね。術名には古代語を使うの」
「なるほどな。とりあえず、了解」

俺が頷いたのを確認し、「じゃあね」と言って再びドアに向かう城井の背中に、最後の問いかけをする。

「なあ、なんで城井はそんなに詳しいんだ？」

常識からかけ離れた内容をすらすらと俺に説明する姿は、少しばかり違和感を抱かせた。まるで、そこにいるのが《ウィザード》本人のような。
目の前にいるのは誰だろう。本人は城井灯子だと名乗った。けれど、彼女は本当に《城井灯子》なのだろうか。
城井は振り返らずにそれに答える。

「……《ウィザード》が起きたのは二年くらい前……。その時、《ウィザード》の記憶が私の中に流れ込んできた。だから、《ウィザード》が知ってることは私も知ってることになるの。さすがに《ウィザード》が生まれてきてから見聞きしたこと全部は覚えてないけど」
「へえ……」
「眠ってる魂が起きれば自然にそうなるのかと思ったけど、井澄くんを見てるとそうとは限らないみたいだね。なにか理由があったのか……もしかしたら《ウィザード》がそれを望んだのかもしれない。

真実はわかんないけど……《ウィザード》は私の問いかけには答えてくれないから」
「……そっか。悪かったな」
謝ると、城井はまた俺を振り返った。きょとんとした顔をしていた。
「なんで井澄くんが謝るのさ。謝るのは私のほうだよ……。巻き込んじゃってごめんね」
笑って、言って、ドアの向こうに消える城井を見送って、城井の言葉に抱いた違和感を、言葉にする。
「……お前だって巻き込まれただけじゃねーのかよ」
言ったって、城井はもう階段を下りてっただろうから、届くことはないけれど。
城井の言うことが本当なら、城井も、ただ《ウィザード》の魂と融合してるってだけだ。立場は俺となにも変わらない。わけのわからない異世界のやつの魂のせいで、巻き込まれたのは城井も同じだ。
城井の言葉が本当なら、いったいなにが、城井に戦う決意をさせたのだろう。

06　過去の事件

金曜日の朝練終了後。部室に男十人が収まって練習着から制服へと着替えている最中に、真嶋が好奇心を隠しもせずに俺に聞いてきた。

「なぁ、城井とどうなった？」
「はあ？」
「コクハクだろ？」
「ちっげーし」
「ち、ちがう、の？」

……御端までそんなこと言う。

ちくしょう、城井め。強制的に巻き込んだりしなかったことには素直に感謝するが、代わりに妙な種を蒔いていきやがった。

これ以上この話を継続させてなるものか、と黙って着替えに専念しようとしたのだが、真嶋が投げ込んだ話題に部内能天気男ナンバーワンの座を欲しいままにしている仲町が乗ってきやがった。

「なになに、なんの話ー？」
「こないださ、井澄に会いにきた女子がいたんだよ。一組の城井っつって、なんか井澄に話あるって言っててさ。そんで昨日、屋上に呼ばれてたんだよな！」
「へぇ！　井澄ってばやるじゃーん！　このこのー！」
「だっからそんなんじゃねーっつってんだろ聞けよ！」

無視すればいいものを、仲町の反応が思いの外うざくて、俺は大きな声で否定した。当の仲町は俺の大声なんてあんまり気にしてない様子でへらりと笑っているが、代わりに近くにいた御端がびくぅ

っ、と体をはねさせた。慌てて「お前に言ったんじゃないから落ち着け」とフォローを入れる羽目になった。こういうところが、御端は少し面倒くさい。

「城井……？」

林田が首を傾げた。

「それって、一組の《城井灯子》さんのこと？」

「ん？　おー、そっか。林田同じクラスだっけ」

「ああ、あの変わりと噂の……」

林田と同じく一組の葉狩が口を挟む。その言葉が少しばかりひっかかり、首をかしげて食いついた。

「変わり者？」

「女なのに男物のごつい腕時計をつけていると、クラスメートが騒いでいた。たしか、夏の衣替えのときだったか」

「ああ、でもあれはたしか……」

林田が、なにかを言いかけてから口を噤んだ。やっぱり言わないほうがいいかな、という言葉が表情から聞こえてくる。はっきり言って、その態度は逆効果だ。余計気になるっつーの。

「なんだよ、林田。言いかけてやめんなよ」

「あー……うん。城井の時計はさ、父親のなんだよ、たしか」

「父親？」

そりゃ、父親なら男物のごつい時計してるだろうさ。一組の連中や俺たちが違和感を覚えるのは、城井が間違いなく女だからだ。そ

りゃ、好き好んでごつい腕時計を身につける女だっているだろうけど。城井とごつい男物の腕時計。この組み合わせはどうにもしっくりこない。
けれど林田は、それが当たり前……というよりは、「仕方がない」と思っているような口ぶりだ。どういうことなんだろう。

「てか、林田なんでそんなこと知ってんのー？　もしかして、そのシロイさんに気があったりしてー！」
「違うって！　城井は同中だったんだよ！」

仲町にからかわれて、顔を赤くしてるんだか青くしてるんだかよくわからない色に染めて否定する林田に、俺は「へぇ」と思った。仲町は「え、そうだったの？」と驚き顔だ。
野球部には、林田と同じ中学出身の部員が他にも三人いる。仲町、間壁、そして高坂。つまり、城井はこの三人とも同じ中学だったということになる。
まあどうでもいいけど。世間は意外と狭いもんだよな。
北上里高校は公立なんだから、近隣の中学出身のやつが多いのは当然だ。特別驚くことはない。
同じ中学出身のはずの仲町は首を捻る。

「うーん……だめだ、記憶にないや。まあ俺なんてあの中学は三年生の一年間しかいなかったしねー」
「そっか、仲町、転校してきたんだっけ」
「そだよー。中三になるのと同時にねー」
「まあ、城井って特別目立つ子でもないし……。俺も、同じクラスになったことはなかったけど……時計のこととか、は……なんていうか、結構話題になってたからさ。それも中三になったときにはだいぶ落ち着いてたから。仲町がわかんなくてもしかたないよ」
「話題？」

「うん……」

林田は少しだけ表情を曇らせて、

「……ご両親が殺されたって。学校中で話題になってた」

トーンを落とした声で、言った。

連鎖反応のように、いつもはうるさい真嶋や仲町を含め、部室の中がしんとなった。

一瞬、思考が停止した。それは多分、俺だけじゃなく半分以上のやつがそうだっただろう。その中で、一番早く復活したのは結局俺だった。

「……事故死とかじゃなくて？　殺人だったのか？」

「うん。ね、間壁」

「……あったな、そういう話」

林田から話を振られた間壁が顔をしかめた。めんどくさそうにも見えるが、あれは単純に不機嫌な顔だ。詳細はあまり思い出したくない、と顔に書いてある。

けれど、詳細を聞きたい、と俺は思った。それがどうしてなのかは自分でもわからなかったが、好奇心なんかじゃないということだけは断言できた。

間壁は眉間に皺を刻んだまま、こっちを見た。

「……朝っぱらからする話じゃねーし、俺もあんま詳しいこと知ってるわけでもねーし。当事者だって、もうこんな話を周囲にされんのうんざりなんじゃねーか？」

「それは……」

言葉に詰まった。間壁のそれは間違いなく正論だ。言い返して覆す余地なんてない。
それでも俺は知りたいと……知らなきゃいけないと、思った。

「……いつだ？」
「あ？」
「だから、その……城井の両親の……中学ん時に、か？」
「ああ……中二んときだな。仲町が転校してくるより前だから」
「……そっか」
「もーいいか？　さっきも言ったけど、あんま話して気分のいい内容じゃねーし」
「ああ、サンキュ」
「……話が一段落ついたとこでだ。お前らとっとと着替えろ！　ホームルーム遅刻すっぞ！」
「うわ、やば！？」

寺本が声を張り上げ、沈んで淀んだ空気を塗り替えた。俺も表面上はみんなと一緒に焦って笑って着替えを進めたけど。
頭の中は別のことでいっぱいだった。
中二のときの事件。つまり、今から約二年前。城井の両親が殺された。
……あいつ、《ウィザード》が起きたの、二年前って言ってなかったか……？

「井澄ー！　ぼけっとすんなよ！　置いてくぞ！」
「ち、ちこく……しちゃう……」
「あ、こら待て、真嶋！　『置いてくぞ』とか言いながら置いてくんじゃねえ！　御端、ほら行くぞ！」
「う、うん！」

部室から飛び出すように駆け出す九組三人を、他の部員が見送る。
「あいかわらず騒がしいな～、九組は」
「仲良くていいじゃない」
寺本の呆れた声と林田の笑いを含む声を背中に受けながら、俺と御端は一人先に飛び出していった真嶋を全力で追いかけた。
先を行く真嶋が肩越しに振り返って、楽しげに声を上げる。
「井澄、競争な！　俺が勝ったら購買のスペシャルカツサンドおごり！」
「するか馬鹿！　一人だけ先にスタート切るとか卑怯にもほどがあるだろ！」
「ハンデ！」
「ねーよ！」
「お、お、おれ、がんばる、よ……！」
「頑張んなくていい！　頑張んなくていいから、御端！　あとスピード落とせ、真嶋！　ひと轢いたらどうする気だ！？」
「轢かねーって！」
ぎゃあぎゃあと騒ぎながら廊下を走る俺たちは、ちょうど教室に向かう途中だった担任に出くわしてしまい、出席簿の分厚い表紙で頭を叩かれる羽目になった。

＊　＊　＊

昼休み、超特急で昼飯を平らげ、六組の高坂を捕まえた。女子に聞くようなことじゃないってことはわかってる。けど、城井と同中

で、俺が知ってるやつで、いろんなこと知ってて聞けば教えてくれそうな相手となると、第一候補は高坂だった。

「城井さん？　うん、知ってるよ。中二の時同じクラスだったから」

ドンピシャリだった。同中どころかクラスメイト経験ありかよ。しかも中二で！

「そういえば、井澄くん、城井さんに告白されたんだって？」

「されてねぇ！　その話どっから……いや、いい、わかった。仲町だな」

「わぁ、よくわかったねー」

高坂と同じクラスには、寺本と仲町がいる。話をする可能性が高いのはこの二人で、他人の告白しただのされただのという話を持ち出しそうなのは間壁より仲町だ。

あいつ後でしめる。

今はその些細な怒りは隅に置いて、ストレートに聞きたい話へと繋げる。

「じゃあ、城井の両親のことも？」

それを尋ねれば、篠岡は顔を曇らせた。

「う、ん……新聞にも載ってたし、ニュースでも流れたし」

知らなかった。もっとも、今だって新聞もニュースも見ていないのだから、中学校の時も今も、そういった話題は周囲の友達や親の会話が情報源だ。もしかしたら耳にしたことくらいはあるかもしれなくても、俺には関係ない、とか思って聞き流したかもしれない。

大いにありえる。

「……それさ、どういう事件だったんだ？　殺されたって聞いたけど」

「え、うん……でも、その……」

高坂が言いよどむ。きっと、感情は間壁と同じく、それについてはあまり話したくないのだろう。ひとが二人死んだって言う話なんだ。話してていい気分はしないだろうし、かつて城井とクラスメートだったってんなら間壁以上に城井の感情を思いやっている部分もあるだろう。

俺は高坂に対して頭を下げた。

「頼む、高坂。教えてくれ」

「……どうして、そんなに知りたいの？」

「……わかんねえ。でも、知りたいっつーか……いや、それも間違いじゃねーんだけど。たぶん、知らなきゃならないことなんだ」

俺も、どうしてこんなに必死になってるのか、自分のことがよくわからない。……いや、違うな。予感がするんだ。それはすごく重要なことなんだって。ここで知らない振りしたら、いつか俺はものすごく後悔するっていう予感。城井に暗示をかけられそうになったときのような、「それじゃだめだ」っていう根拠のない焦燥感によく似たなにか。

高坂にそれをうまく説明できる自信がないから、俺はとにかく、そう言うしかなかった。

「……中二の……冬だったと思うよ」

「え？」

「城井さんのご両親の事件」

高坂は、痛ましいと言わんばかりに表情を曇らせながら、教えてくれた。

「城井さんはね、一月に転校してきたの」

「転校？」

「うん。冬休み明け直後じゃない、中途半端な時期だったから、最初はそれでちょっと注目浴びてたんだけど、誰も城井さんが転校してきた理由を知らなかったの。先生は頑なに口を閉ざしてたし、城井さんはその話になると笑ってごまかしちゃってたから。でも……そういうの、調べるのが得意な子がクラスにいてね。それで、新聞に載ってた事件の被害者が城井さんのご両親だったんだってわかったの」

やっぱり、城井は両親が殺されたのは中二のときで間違いないらしい。《ウィザード》が起きたのも、城井曰く二年前。

考え込む俺に、高坂は思い出したように言い募る。

「……今、猟奇殺人事件って話題になってるよね」

「ああ」

「そのニュース見て、お母さんとお父さんが『またか』って言ってたの。それで、どういうことなのか聞いてみたのね。それで私も思い出したんだけど……城井さんのご両親の事件も、猟奇殺人事件だったの」

「……え？」

「私ね、そういうの詳しく調べ上げられるの、嫌なんじゃないかなって思ったから、あんまり事件の内容を調べようとはしなかったんだけど……なんていうか、派手な事件だったから。どうしても目に入ってくることもあって。本屋さんやコンビニで見かける週刊誌とか。城井さんが転校してくる前はそんなこと意識してなかったから、

新聞やニュース取り扱ってた内容をなんの気なしに見てたし……」

そこまで言って、高坂は一呼吸置いた。

「そういうのの見出しはいつも、『猟奇殺人事件』だったの」

それはしばらく無言で、高坂から得た情報を頭の中に羅列し続けた。高坂が居心地悪そうに見上げてくるので、俺は「サンキュ」と言って、高坂を解放した。

九組の教室に戻りながら、考える。

なんだか、ひどく嫌な感じがした。

07　夜

「とっとと着替えて出ろよー」
「寺本オカンみてー」
「誰がだ！」

放課後の練習を切り上げて、みんなで部室で着替える。キャプテンの寺本がキャプテンらしくみんなを促すけど、真嶋にからかわれて威厳ゼロ。いつものことだ。

「でもさ、びっくりだよなー、猟奇殺人なんて」
「だな」
「被害者男だったし、犯人やっぱ男かなー。女じゃバラバラ死体作んの難しいよねー」
「工夫すりゃ不可能じゃねーだろ」
「あー、それもそっかー」
「ひと殺して、バラバラにして、なにが楽しいんだろうね」
「異常者の思考回路なんざ知るか」
「そりゃそーだ」

着替えながら、やっぱりいつものごとく、とりとめない会話を繰り広げ笑い合うチームメイトたちを見回して、静かにため息をつく。まあ、普通はこうなるだろう。俺だっていつもならあの輪の中に入って一緒に笑っただろう。……もうそんな気分にはなれないけどな。

ふと、御端を見る。顔が青い。見るからに青い。真っ青だ。しかも指がブルブル震えてる。そのせいか、着替えがなかなか進まない。

「……御端、怖いのか？」
「こ、こわく、ない、よ？」

バレバレの嘘をつく御端。顔はますます青くなり、指どころか体全部がぶるぶると震え出した。このビビリめ。
まあ、このくらいビビってくれてるほうがやりやすいから助かるけど。

「おい、へらへら笑ってないでさっさと着替えろよ。んで、とっとと帰ろうぜ！」
「なんだよ井澄ー、そんな怖い顔してせかすなってー」
「井澄怖いのかー！」
「あー、そーだよこえーよ。だからとっとと帰るぞ」

不満そうな仲町に茶化す真嶋。俺は開き直った様子を見せるようにして切り返した。そして続けざまにカードを切る。

「そんなゆっくり帰りたいんなら勝手にゆっくり帰れ。俺は御端と一緒に先帰るから」
「うぇ……！？」
「あ、御端も怖いんかー！」

途端、真嶋を筆頭に、部室の中が「じゃーしょうがねーな」といった空気に変わる。
御端効果って凄まじいな。俺が「怖い」って言っても全然説得力ないみたいなのに、御端が「怖い」って言ってるとなると、みんなそれに納得する。まあ、実際怖がってんの、俺じゃなくて御端だしな。
とにかく、誘導成功だ。
着替えを終えて、携帯電話の時計を確認する。コンビニに寄らずに帰るのは難しいだろうけど……。時間が短くなってるとは言え、やっぱ疲れてるからな。家に帰るためのエネルギー補給が必要だろ

う、俺含め。それもとっとと買ってとっとと食って家を目指せば、まあ全員八時までには余裕で家に帰りつけるだろう。
一番着替えるのが遅い御端の帰り支度を少しだけ手伝って、みんなして部室を出れば、すぐそこで高坂が待っていた。コバセンと監督からの厳命で、高坂が五時半前に帰れない時は必ず俺たち男子部員と一緒に帰ることになった。同じ方面の間壁や林田、それに仲町が送ってやることになっている。やっぱ、女子に対する心配は、男子より比重がでかいからな。
真嶋が時折御端をあっちこっち連れまわしているらしいので、御端が少し心配かとも思ったが、よくよく考えれば真嶋は御端が本気で嫌がることはやらない。だから、御端のこの様子なら、ちゃんとまっすぐ帰らせるはずだ。真嶋は天然で凄まじいまでのゴーイングマイウェイな男だが、野球と御端については信頼できる男だ。
みんな考えることは大差ないのか、買い食いはいつもに比べて素早くすませて、まず上り組と下り組に別れる。下り組は駅方面、上り組はその逆方向だ。別れ際、仲町たちに「こーさかちゃんと家まで送ってやれよ」と言ってやれば、仲町から「わかってるよー」との答えが返ってきた。仲町は能天気なやつだけど、女子への気配りっつーか思いやりっつーか、そういうのを俺らの中で一番心得ている。必要のない言葉だったかもしれないが、まあこんな風にからかうのも立派なコミュニケーション方法だ。
俺たちもそれぞれ家を目指していく。
御端、真嶋と道が分かれる際に、真嶋に言ってやる。

「真嶋、御端ちゃんと送れよ」
「わかってるって！」
「じゃーいい」

あれ、なんか御端の扱いが高坂並み……？　まあいいか、心配なのは事実だし。

「い、井澄くん、は、だ、だいっ……？」
「俺は平気だから。御端はまっすぐ家に帰ることだけ考えな。家帰っても怖かったら、俺とか真嶋とか……誰でもいいや。電話でもしろ」
「わ、わかった！」
「じゃあなー、井澄ー！」
「ま、またね！」
「おー」

いつも通り御端と真嶋を見送って、俺は自転車にまたがる前に携帯電話からみんなにメールを送る。怖かったら誰かに電話でもしろって御端に言ったから、もし電話かかってきたら相手してやって。そんな内容だ。真嶋は宛先から除外する。あいつは直に聞いてたんだから必要ないし、御端から突然電話を受けても驚いたりしないだろう。他の奴らはどうかわからないから、一応事前に連絡を回しておく。

メールを送信して、携帯電話をぱくんと閉じて、自転車にまたがって家に向かってペダルを漕ぐ。

家についたら六時十五分。うん、余裕。よし、と呟いて家の中に入る。

「ただいまー」
「お帰りー。お風呂入れるよー」
「おー」

台所のほうから聞こえるおふくろの声に簡単な返事をし、かばんを部屋に放り込んでから風呂場へ向かう。

洗面所でTシャツを脱いだところで、タオル類がしまわれているチェストの上に放り出してあった携帯電話がぶるぶると震えた。手

にとって前面ディスプレイを見れば御端の名前、しかもメールの受信ではなく電話の呼び出し。
俺かよ。そりゃ電話しろっつったけど、俺かよ。まあいいけど。
携帯電話の通話ボタンを押して、携帯電話を耳元まで持っていく。

「もしもし、御端？」
『い、井澄、くん！』
「おー。もう家着いたのか？」
『う、うん。井澄くんも、家……？』
「着いてるかって？」
『う、うん』
「着いてる着いてる」

御端の声は少し震えているみたいだけど、着替え中や帰り道よりは多少元気になっているようだ。そのことにほっとする。家に帰り着いて安心したのか、真嶋が上手いこと元気付けたのか。まあ、それはどっちでもいっか。

「真嶋は？　ちゃんと家まで送ってったか？」
『う、うん！　家の前まで、一緒で……さっき、帰ったよ！』
「おし。じゃあ後で電話してやれ。ちゃんと家着いたかーって」
『わ、わかった！』

まあ、真嶋ならちょっと遅くなっても大丈夫だろ、たぶん。
……大丈夫、だよな。まだ七時にもなってねーし。城井は、八時半以降は家出るなって言ってたわけだし。……あ、そういやみんなにそれ言うの忘れてたな。さりげなくって、案外難しいよな。真嶋とか仲町あたり、「なんで」って聞いてきそうだし。

『……あ、の……井澄、くん』

「ん、どした？」
『う、えっと……うぅ……っと』

電話口で言葉に困っている御端を、じっと待つ。
電話ってのは、相手の顔が見えないから辛い。普段はそんなこと思わないんだけど、御端の場合、声と表情、仕草、そのすべてが御端の思考のヒントになるから、声以外わからない電話はなかなか難しい。とにかく、今の俺は、御端の言葉を待つしかない。
待つこと十秒以上。ようやく、御端が言葉を発した。

『ごめん、ね』
「え？」
『井澄くんは、こわくなかった、よね……俺が、ビビってた、から……みんなに、言ってくれた、んだよ、ね』
「……あー……」

そうなんだけど。たしかにそうなんだけど。まさか御端が気づいてるとは思わなかった。……とろそうに見えて結構鋭いんだよな、こいつ。
誤魔化しても御端は気にするだろうから、俺は肯定しておくことにした。

「……まあ、気にすんな。事件が気味悪いってのはほんとに思ってるし。高坂もいることだしな。とっとと帰ったほうがいいと思ったんだよ。むしろ、謝るべきは俺のほうだろ。お前のこと勝手に理由に使って、悪かったな」
『お、俺、気にしてないよ？』
「そっか」
『でも、やっぱり、ごめん、ね』
「……だから、」

『あと、あ、ありがとっ』

ごめんね、と謝り倒しそうな御端を止めようと、出かかった言葉が引っ込んだ。

なんだ、言えんじゃん、こういう時にも、「ありがとう」って。出会ったばっかの頃の御端なら、絶対言わなかった一言だ。親切にされたら、むしろ相手に気を使わせたことに恐縮してか、御礼の言葉じゃなく謝罪の言葉ばかりが出てきていた。この変化のことを思うと、なんだか気分がいい。

「おう」

『え、えへへっ……あ、今、へーき、だった？　話してて……』

「ああ。でも、そろそろ真嶋にも電話してみてやったら？　もう着いてるころだろ」

『う、あ！　そ、そうだね！』

「真嶋が出なかったらまた俺にかけてきていいから。じゃな」

『う、うん！　あの、ありがと、井澄くん！』

その言葉を最後に、通話が切れる。携帯電話をぱくんと閉じれば現在時刻が目に入る。六時半ジャスト。

きっとこの後、御端はそのまま真嶋に電話をかけるだろう。俺が言った通り。

そういや御端から電話かかってきたのって、これが初めてだ。できればこんな話題じゃなくて、もっと普通に、友達同士のくだらない話ができればよかったんだけどな。場合が場合だからしかたない。

真嶋は御端と電話でそういうやりとり、したことあんのかな。……ありそうだな、あいつらなら。

「……つか、俺、もしかして過保護すぎか……？」

ため息をついて携帯電話を再びチェスとの上に放り出し、服を脱ぎ捨てて風呂に入る。
さっさと体と髪を洗って、湯船に浸かってある程度体があったまってから風呂を出る。着替えて頭を拭きながら携帯電話で時間を確認する。六時四十二分。
喉が渇いたので水を飲もうと台所に向かうと、晩飯の用意はあらかた済んでいた。水をゆっくり飲んでる間に準備は整い、おふくろと二人で晩飯を取る。親父はまだ仕事から帰ってきていないし、兄貴は大学入学と同時に一人暮らしを始めたので、どうしたって晩飯はおふくろと二人になることが多い。

「……なあ、おふくろ。二年前にも、今のと似たような事件あったって聞いたんだけど、覚えてる？」
「似たような……？　ああ、あれね……」

ふと尋ねてみた内容への返答には、疲れ切った響きが込められていた。

「あんまり食事中にする話じゃないわねー」
「……悪ぃ。でもさ、そんな似てるのか？」
「そうね……死体の状態は似てるかしら。あの時はニュースなんかで、『獣に食べられたみたいだ』って、ずいぶん騒いでたわ。あれも結局、ちゃんとした解決はしてないのよね……。たしか、あんたと同じ年の女の子がいたはずだと思うけど……どうしてるのかしら」
「……」

最後のほうは独り言だと判断し、俺はそれに答えることはしなかった。
空になった食器を流し台に出して、部屋に戻る。ベッドにぼすんと横たわり、携帯電話で時刻確認。七時二十九分。

まだこんな時間か。
疲れてはいるが、こんな早くに寝るのはなんだか時間がもったいないような気がして、体を起こす。十秒ほど悩んだ挙句、かばんに詰め込んできた英語のプリントを引っ張り出した。たしか、これは明日提出の課題だったはずだ。以前なら、家に帰って課題をする元気も時間もないもんだから、朝学校に行ってからみんなで急いで仕上げるのが常だった。しかし、今は時間も元気も余っている。あんまりやりたいとは思えないことだけど、せっかく時間があるんだからやってみることにした。
携帯電話は、鳴らない。御端は無事真嶋と連絡が取れたんだろう。
プリントに羅列された日本語に対応する英単語を、辞書を引いて書き込んでいく。こんな風に勉強机に向かうのは、前回のテスト期間以来だなー、と思う。真嶋に至っては、テスト期間ですら勉強机を利用していないはずだ。プリントやら雑誌やらが山になってて、それを片付ける気はあまりないらしい。御端の机は真島ほどの惨状じゃないだろうが、どっちにしてもあまり活用はされていないだろう。あの二人の勉強時間は、基本的にテスト前に部員みんなでやる勉強会だしな。
プリントの解答欄を全部埋め終わって、イスに腰かけたまま背中を伸ばす。勉強机に向かってると、どうしても猫背になってくる。だめな姿勢とわかってても、なかなかなおらないもんだ。
時間を確認すると、ちょうど八時半だった。どうでもいいことを考えながら進めていたせいか、思った以上に時間を使った。
やっぱり寝るにはまだ早い気がして、本棚に詰め込んである漫画を一冊手に取った。中学生の頃に流行ってた漫画で、俺も結構はまって、単行本を買い揃えた。そのページをめくりながら、けれど頭の中を過ぎるのはまったく別のことだった。
八時半。城井は今、戦っているのだろうか。
考え出すと止まらないし、おまけにまとまらない。
ため息をついて漫画を元の位置に戻し、ベッドに背中からダイブ

する。俺の体重を受けて、ベッドが小さく音を立てたが、気にするほどのことじゃない。
今まで、俺がみんなと苦しくも楽しい部活に励んでいる間も、布団にくるまって爆睡してる間も、城井はひとりで戦ってきたのだろうか。そう考えると、妙に胸のあたりがもやもやしてくる。
俺には戦わなくていいと言った城井。たったひとりで、《魔獣》とやらと戦う城井。

「……《アリオ》」

右手を突き出し、何気なく唱えてみると、屋上で城井が見せてくれたようにどこからか光が集まり、それが俺の手の中で剣になった。
これはきっと《ナイト》の剣だったのだろう。柄を握る感触を懐かしいと思うのは、俺の中のどこかに《ナイト》の記憶が残っているからなのかもしれない。
城井は言った。俺には、体と命を張る理由はないだろう、と。なら、城井にはあるのだろうか。体と命を張るに足る理由が。
俺はすでに、それについてひとつの仮説を立てていた。

――確かめねーと。

決めて、ベッドから起き上がった。

08　灯子の選択

「《ザキ・クレスタ》！」

城井は最も唱え慣れた呪文をなぞった。とても簡単な氷の魔術。氷柱を出現させ、敵に向けて放つ。先端が鋭く尖ったそれは殺傷能力抜群だ。

城井が放った氷の刃は敵の鼻頭を潰し、目を潰し、眉間を貫いた。たったそれだけ。たったそれだけで、敵の生命は断たれる。

頭か、胸の真ん中。そんなところを貫かれれば、どんな生物だって死に至る。普通なら、それ以外の箇所でも、急所でなくても、血を流しすぎれば死ぬ。けれど、城井の前に立ちはだかる敵には、その常識がいまひとつ通用しない。

頭か、胸の真ん中。彼らにとって、そこ以外への攻撃は意味を持たない。痛覚はあるらしく痛がる様子は見せるが、それだけだ。緊急時に隙を作る手段にはなっても、攻撃としてはまったくの無意味。その傷はすぐに癒えてなかったことになってしまう。

城井はそれを、生物という枠にはめこんでいいものかどうか、度々考えていた。特に、その終焉を見届けるときにはその思考にとらわれやすい。

今もそうだ。負傷箇所から噴き出て行く黒い煙のようなものを眺めながら考える。頭と胸の真ん中以外の攻撃が致命傷にならない。倒せばまるで幻のように消えてしまう。それらの事実は一体、なにを指し示しているのか。

「……三体目、か」

道幅が広い住宅地の中で、城井は呟く。真っ白な吐息が同時にこぼれた。

本当は人気のないところで交戦するのがベストなのだが、偶然この場所で一体目を見かけてしまったのだ。周辺を軽く探ってみたが、犠牲者は今のところいないらしい。幸いだ。

次はどのあたりに出るだろう。きっとこの町の中だ、と城井は考えた。

ここは井澄の住んでいる町。一週間ほど前から、時折この町中に《敵》が現れるようになった。おそらく、井澄を探しているのだろう。排除すべきものとして。

わけのわからない世界だ、と城井は思う。《あっち》の常識は、《こっち》の常識から逸脱しすぎている。《ウィザード》の記憶がなければ、とてもではないがこうして生きていられなかっただろう。

だからこそ。

城井は井澄に、防衛線を引いてやった。

これは馬鹿げたことだと、城井自身もよく理解していた。馬鹿げた事態だ。馬鹿げた襲撃に馬鹿げた迎撃。そうは思っても、城井には選択肢がなかった。

本当に他に選択肢はなかったのか、ここまですることはなかったのではないかと、頭の奥で囁く声。

本来ならば、城井にはなんら関係のない事象だったのだ。関係あるのは城井ではなく、城井の中にある《ウィザード》の魂なのだから。城井自身がこうしてわざわざ足を突っ込む必要性は、なかった。

忘れてしまえばよかった。全て。

けれど城井は、無視することなどできなかった。知ってしまえば、知らなかった頃には戻れない。たとえ記憶を失おうと、過去はついて回る。なにかのメディア作品でそんなことを言っていなかったか。一瞬、どんな作品だったか思い出そうとしたが、すぐにどうでもいいことだと気づく。

城井は知ってしまった。知りすぎた。共感を覚えた。逃げ道はあったかもしれないが、それは城井の意思で閉ざされた。

そうして城井は、戦うことを決めた。

けれど、井澄は違うのだ。
城井は星の見えない夜空を見上げる。どんよりした雲が空を覆っていて、月の明かりすらほのかにしか確認できない。
一週間と少し前。張り巡らせたアンテナによって《敵》の存在を感知し、それを辿った先にいた《敵》をすぐさま排除した。しかし、無用心に足を止めている姿を見て嫌な予感がしてはいた。《敵》が倒れ、開けた視界に姿を見せた井澄に、「最悪だ」と心の中で呟いたことを、今も忘れていない。
できれば誰も巻き込みたくはなかった。特に、《ナイト》と《姫》は。自分と同じ道と辿らせたくなかった。たとえそれがどれほど無茶で無謀な願いだったとしても、城井は願わずにはいられなかった。自分はすでに大切なものを二つ失っている。だからせめて、あの二人には、自分には叶わなかった平穏無事な日々を過ごしてほしいと祈らずにはいられなかった。
なのに、巻き込んでしまった。あのままもう一体が襲ってきさえしなければ、井澄をこんなことに巻き込まなくて済んだのに、と思う。同時に、すぐに襲撃に気付かなかった自分に憎しみが湧く。そして、井澄の言葉に負けて《ナイト》を起こしてしまった自分の弱さに憤りを感じる。
もっとも、まったくの無関係な人間に犠牲が出てしまっている以上、《ナイト》と《姫》を巻き込みたくないなど、身勝手な願いでしかないだろう。そう自覚できても、願わずにはいられない。今もなお。
幸いだったのは、井澄が《ナイト》の記憶を見ていないことだ。
城井は井澄に一つとして嘘は言っていない。しかし、城井が話した事情はあくまで城井の言葉。言葉は人間にとって非常に便利な道具だ。言葉にすれば、どんなことでもある程度は伝わる。だが、言葉は経験と想いをそのまま他者に伝達する能力は持っていない。これは言葉が悪いのではなく、人間という生物の特性だろう。
同じ経験をした二人の人間が存在したとする。彼らはそこで、同

じ感想を持つだろうか。持つこともあるかもしれない。けれど、人間は育つ環境によって価値観を左右される生き物だ。たとえ兄弟であったとしても、そこには必ず差異が生じる。十人十色、という言葉が日本にはある。まさしく、人間とは個々の価値観と感性を抱く生き物なのだ。大きな括りで見れば同じ感想であっても、深く掘り下げればずれを発見できるのが当然と言える。

城井は事情を簡単に、大まかに井澄に話した。そこに想いは込めなかったつもりだし、井澄には経験の記憶が存在しない。

だから、城井の気持ちも、この事態の根っこのところも、井澄にはほとんど伝わらなかっただろう。

それでいいのだ。

「……あー……また来た」

新たにアンテナに引っかかる一体の《敵》の存在。頭の中に違和感に顔をしかめる。数日前の失態から、城井はアンテナから発せられる信号を幾分強めた。近くまで《敵》が近づいているのに、考え事や動揺していたら気付けないなど、アンテナを張り巡らせた意味がない。違和感にはそのうち慣れる。

城井は移動しない。《敵》のほうから城井に近づいてきており、《敵》と城井の周辺には他の人間は存在しないからだ。

井澄には選択の余地が与えられた。踏み込むか、踏み込まないか。たったの二択だが、この二択の差はは大きい。

井澄には《ナイト》の記憶がない。井澄はなにも知らない。そして、まだなにも失っていない。だからこそ、選ぶことができる。他でもない井澄本人の気持ち次第で、全てを選ぶことができる。

井澄が《こちら側》へ来ることはないだろう、と城井は思った。それがほんの少し心細かった。そして同時に嬉しかった。

ひとりで戦うのは怖いし、とても疲れる。けれど、巻き込むのは嫌なのだ。矛盾した気持ちを抱えていた。

選ぶ権利を得た井澄は、「一緒に戦う」とは言わなかった。
それを「よかった」と思えることに、城井は心底安堵した。

「次から次へと……まったく、ほんと趣味が悪いったら」

ずしん、と重そうな足音が響く。新手がここまで来たのだ。
親玉の顔が見てみたいものだ。そう思いながら、杖を構え直す。
ちらりと後方に視線だけ投げかければ、誰もいない。だからと言って安心しきることはできない。人避けの術もしかけてはあるが、万が一ということもある。もっと人が来ないような場所に誘導するべきだろうが、この場はしとめてしまったほうが早い。
《敵》が城井の視線の先、数メートル手前のところで足を止めた。獣のくせに、背筋が粟立つようないやらしい笑みを浮かべているように見えるその顔には、嫌悪しか感じない。
目の前の《敵》は俊敏な動きを特性としているが、その割には速攻をかけてくることが少ない。嗜虐的な性格のせいかもしれない。狼のような容貌をしていながら、野生動物ではありえないほど、彼らは狩りという行為を楽しんでいる。傷つけ、破壊し、弄ぶことに愉悦を感じているようなのだ。そんな趣味の悪い生物は人間だけで十分だろうに。
《敵》は《ウィザード》を確認したのか、一際深く笑みを刻み、脇目も振らず城井に迫ってくる。《敵》の標的は《ウィザード》と《姫》。先日の一件から《ナイト》も含まれるようになったと考えるべきか。ひとたびそのどれかを認識すれば、それだけを追ってくるようだ。まるで、その行動をプログラムでもされているかのように。
浮かんだ、奇妙とも言える考えに、考えた城井自身が目を丸くした。そんなことはありえない、と打ち消しかけて、どうしてありえないと言えるのかと自分に問いかける。
ありえない、と言える証拠がない。「ありえない」という証拠が

ないのであれば、それがどれほど常識から逸脱した事象であれ、いくらかの確率で「ありえる」ということになる。
生き物になにかしらの行動を意図的にプログラムすることは不可能だ、と城井は瞬時に考えた。しかし、この世界においても『洗脳』という言葉が存在する以上、それに近いことは可能かもしれない。その技術がどの程度なのかは、そういったことに今まで興味を持って来なかった城井にはわからない。
それに、それはこの世界においての常識的な考え方の範疇でしかなく、《あっち》のことは《こっち》の常識でははかれない。もしかしたら、なにかしらの術を使用すれば、それも可能なのではないか？
一瞬のうちに広がった思考の波にとらわれ、城井の体は数秒間停止していた。はっと気づいたときには、《敵》は目前まで迫っていた。
交戦中だったのに、と奥歯を噛み締め、杖を向けて口を開いた。
瞬間、ぞくり、と背中に悪寒が走った。肩越しに振り向くと、正面から向かってきている一体とは別に、もう一体。風のように疾走し、その勢いのまま城井に飛びかかってくる。
油断していたつもりはなかった……というのは、虚しい言い訳にしかならない。城井の体にはここ数日の連戦で間違いなく疲労が積み重ねられているし、不覚にも思考の海にはまってしまっていた。ほんの数秒、されど数秒。たった一秒の時間が運命を左右することだってままあることだ。信号をまた強めなければ、と冷静な判断が思考の片隅に浮かぶ。
対応しきれない。このままではその爪にかかってしまう。
負傷してもかまうものか、と城井は姿勢を正す。道路の真ん中で挟み撃ちにされた格好だ。それがどうした。城井のすべきことはひとつ。自分以外のだれかにその爪がかかる前に、この闇そのもののような獣を消すことだ。
さあ来い、と痛みを覚悟する。すでに呪文は間に合わない。なら

ば、まずはこの身を《敵》に捕らえさせる。やつらの体は大きい。だからこそ、向けてくる爪と爪の間には城井ひとりくらい余裕で挟めそうな空間ができている。そこを上手く見極め、入り込む。上手くすれば二体の獣がお見合いする格好になるはずだ。そうなればやつらの動きは少なくとも数秒停止するだろう。その隙を狙う。

けれど、ことは城井のシミュレーションどおりにはならなかった。まず後方から迫ってきていた《敵》が不自然に前のめりになった。その光景を驚きいっぱいで横目で確認しているうちに前方から迫ってきた《敵》の爪が左頬を掠った。その直後、銀色の一閃が《敵》の頭部を切り裂いた。

アスファルトに倒れた二体の《敵》。前方の《敵》のすぐ脇に、

「よっ」

井澄が、《ナイト》の剣を持って立っていた。

09　孝弘の選択

家を飛び出して、まず城井がどこにいるのか探そうと思った。なんとなくこっちにいる気がする、というなんとも頼りない勘を頼って夜の町を駆け抜け、その先で《魔獣》二体に挟み撃ちにされている城井を見つけ、考えるより先に体が動いた。

剣を握り締めてまず手前の一体を斬る。斬った一体を踏み台にして高く跳び、もう一体の頭の斬りかかる。

重厚な音とともに倒れた《魔獣》。その横に立った俺の姿を認めて、城井がぽかんとした表情を浮かべた。相当驚いているらしい。

とにかくこの場を移動したほうがいいだろう。城井にそれを提案しようとした直後、城井の背後で闇が動いた。一体目を倒し損ねたのか。反射的に体が強張るが――

「《ザキ・クレスタ》」

俺が声を上げる前に、城井が体の向きは変えず、肩越しにちらりとだけ振り返って冷静な声で唱え、それに呼応して現れた氷の槍が《魔獣》の頭部を容赦なく串刺しにする。

……こう言っちまうのはなんだけど、えげつねーな、結構。

まだ来るか、と倒れる《魔獣》を見続けたが、結局《魔獣》はもうぴくりとも動かず、氷が刺さったところから黒い煙が吹き出し、存在が薄れていく。視線を自分の脇に移動させると、さっき俺が斬り倒した《魔獣》も、同じように傷口から黒い煙を吹きだしていて、夜に溶けるように姿を消した。

なるほど。ファーストコンタクトの際、気がつくと《魔獣》の姿は影も形もなかったのは、こういうことか。

「……とりあえず、ありがとう。助かったよ」

「どーいたしまして。って、お前怪我！」
「ん？　ああ、これね。なんともないよ、こんな程度。……ん、もう血も止まってるし」

左頬にできていた裂傷は、十中八九さっきの《魔獣》の爪によるものだろう。
怪我をした本人は、ずいぶんけろっとしているが……痛くないのか？　いや、たしかに血は止まってるみたいだけど。

「このくらいなら、一晩で治るかな」
「……え、なにその超人発言」
「井澄くんだって治るよ」
「うそ！？」
「ほんと。ただし、《力》を解放していれば、だけどね」

城井は、俺が握っている剣を軽い動作で指差した。《力》の解放って……これ出してる状態のことか？
剣を軽く持ち上げて、城井を見返す。

「……そうなのか？」
「《力》を解放している間だけね。治癒はハイスピードだし、痛みもあんまり感じない。その代わりと言っちゃあれだけど、後の疲労感が半端ないんだけどね」
「へぇー」

なんだそれ、すげーな。
言われてみれば、一週間ちょっと前の戦いで城井は相当ひどい怪我を負っていた。普通に考えて、一週間なんて短いスパンで回復できるとは思えない。だって、腕貫通してたんだぞ？　その驚異的な治癒スピードはこの《力》ありきってわけか。どうなってんだろう

な、これ。
素直に感心する俺に、城井はじとっとした視線を向ける。
「ていうか、なんでここにいるの？　散歩？　危ないって、私ちゃんと言っといたのに、感心しないなぁ」
「……だから来たんだよ」

短い言葉だったが、それで俺の気持ちは伝わったらしい。城井は心底不思議そうな顔をして俺を見上げている。

「……関わらないんじゃなかったの？」
「……そう思ってたんだけどな。最終的な結論は、お前の答えを聞いてから出すことにした。さっきのはとりあえず、条件反射だ」
「……遅くなるとお家の人が心配するんじゃない？」
「そこは問題ねーよ。窓から出てきたから」
「……窓？」
「おう。便利だな、《ナイト》の力は」

おふくろは俺の外出を知らないはずだ。一度、一階に下りてお茶飲んで、その後玄関から靴を持ち出して部屋に戻った。パジャマ代わりの長袖Tシャツとジャージズボンから外出しても問題ない格好に着替え、しっかりコートを着込み、靴と剣をそれぞれ片手に持って、窓から飛び出した。
城井曰く《力》を解放している状態だと、なんだかめちゃくちゃ体が軽い。二階から飛び降りたってのに、らくらく地面に着地できてしまった。

「ってことで、城井、今話せるか？」
「はぁ……ちょっと待って。もう一体近くにいるみたいだから、それ片づけたら」

「オッケー。じゃあ付き合う」
「別に一人でも大丈夫だよ」
「そのままどっか行かれたら困るからな」
「行かないって」

苦笑する城井に、半ば無理矢理ついていって、城井が《魔獣》を倒すところをすぐ傍で見届けた。さっきと同じように、頭を串刺しにする。なんか、慣れている感じだ。この間、俺が見ている前で苦戦してたのは、俺の存在に気を取られていたせいなのかもしれない。

相対する《魔獣》ってのが危険だってのはわかってるつもりだけど、頭部串刺しは、やっぱえぐい。それを平然とした顔で実行する城井は相当えげつないと思う。

「……そりゃあ頭潰せば終わりだけどさ」
「そうだけど、それだけじゃなくてね。急所なんだよ。覚えてる？　頭と胸の真ん中。ここにダメージ与えないと倒せないんだよ。腕もぎ取ってもすぐ再生しちゃうの」
「もぐとか言うな！　……ん？　だとして、なんで胸じゃなくて頭狙うんだ？　頭のが的としちゃ小さくて、狙いにくいんじゃないのか？」

……ってな感じの話を、漫画かなんかで見たことある気がするんだけど。俺の疑問に、城井は苦笑した。

「それはそうなんだけどね……胸狙うと、腕でカバーされちゃうことが圧倒的に多くて……」
「……なるほど」

経験的に、頭を狙ったほうが早く片付けられる、ということになったらしい。まあ、城井の狙いは正確みたいだから問題ないんだろ

うけど。

「さて、話って？」

「ん。もう大丈夫なのか？」

「うん、とりあえずは、ね。アンテナに引っかかってこないし」

「アンテナ？」

「あちこちにね、こういうのを設置してあるんだよ」

城井が取り出して見せたのは、形がきれいに整えられた水晶のような、小さな細長い石だった。大して明かりのない夜の中であっても、それははっきりとわかるくらい白いものだった。

「自分の目だけじゃどうしても足りないからね。これに魔力を込めまくって設置しておいて、付近に《魔獣》がいるようなら私に知らせが届くようにしてあるの……信号みたいなね」

「はー、なるほどな。で、毎晩見回りしてるわけか？」

「……」

「学校来なかった一週間も、こうやって見回りだけはしてたのか」

「……」

「……あの狼みたいな《魔獣》は、今話題になってる事件に関係あんのか」

「……井澄くんは理解能力ありすぎて困るわー」

そう言って城井は、本当に困ったように笑った。

立ち話じゃなんだから、と城井が言い、俺たちは近くにあった公園のベンチに並んで腰掛けた。

剣も杖も、必要ないからしまった。《しまった》っていうか、こう、光の塊になって消える、って感じなんだけど。どうも普段は俺たちの内側にあるものらしいから、《しまった》でいいだろう。

途端、あんなに軽いと思った体がものすごく重いように感じられ

た。これが、城井曰く《半端ない疲労感》ってやつなんだろう。城井は慣れたもので、表情は一切変えない。俺のほうも、驚いた顔は見せてもあからさまに「疲れてます」って顔はしない。夏頃の部活終了後に比べれば全然だ。

「井澄くんのさっきの推測は、全部当たりだよ」

城井は、一番最初にそう言った。

「前二つの質問は、そのままそのとおり。訂正の余地もなし。理由は、まあ《姫》の魂と融合した子を守るためでもあるんだけど……。最後の質問にも関係してる。井澄くんが言うところの、今話題になってるあの事件」

「……やっぱりか」

猟奇殺人事件。

力任せに引きちぎられたような状態らしい死体。人間の二倍以上のでかさがある狼のような《魔獣》の存在。知ってしまった以上、この二つの関係を疑わないほうが無理がある。

顔をしかめた俺の隣で、城井は涼しい顔のまま続ける。

「あの狼みたいな《魔獣》は《ゴル・ウルフ》っていう種類でね。《魔獣》っていうのはそもそも、普通の野生動物とは区別されて、普通の野生動物以上に恐怖の対象なんだ。見た目どおり、あれは狼に近い種だとは思うんだけど」

「サイズがけた違いだな」

「あはは、たしかに！　人間よかでっかいもんね！」

城井はひとしきり笑うと、静かに続けた。

「……《ゴル・ウルフ》はさ、肉食なんだ」
「……」
「ていうか、《魔獣》自体が基本的にはそうみたいなんだけど。むしろなんでもこいって感じかな？　……夜とはいえ、八時半以降なんて、出歩く人は少なくないじゃない。中学生まではそんなにいないかもしれないけど、高校の運動部なんて……井澄くんたちがいい例だよね。遅くまで活動してるところは結構あるし。大学生だってサークルとかバイトとかあるだろうし、社会人になれば九時までに帰らない人なんていっぱいいる」
「……食べるのか」

人間を、とは口にしなかった。そんなの、もう、仮説を立てた時点でわかりきっていたことだったけれど、確認せずにはいられなかった。
城井の表情が、苦しげなものに変わる。

「食べる」

回答はひどく簡潔だった。
それから数秒の間をおいて、更に続ける。

「《ゴル・ウルフ》は、《あっち》でも特に目撃例が多い《魔獣》だった。目撃件数、イコール被害件数だよ。ただし、集落単位のね。畑を荒らし、ひとを食らう。それが《魔獣》なんだ」

無意識のうちに、俺はごくりと喉を鳴らした。集落単位の被害。つまり、被害件数、イコール死者数じゃない。一件の被害の中で、複数人の被害者が出ているということだ。

「正直なところ、《魔獣》についてはわかっていないことのほうが

多いんだ。……さっき、見てたよね。《魔獣》は死んだら消えてしまうから、調査するにも研究するにも限界がある。わかっているのは、体から有害な物質かなにかを放出してることと、人間を含む様々なものを食べること。……あいつらを放つっていうのは、おそらく獲物を見つけたら食べてもいいっていう前提のもとで行われることなんだと思う。目の前の獲物を狩って食べる。……動物として、その本能は間違ってないんだろうけどね。追手として送り込まれてきてる以上、野生じゃないんだろうけど……特定の標的がいるってこと以外、野生のものとなんにも変らないんじゃないかってのが、今のところの私の見解」

「……事件の、犠牲者は、……」

「……《ゴル・ウルフ》が連夜襲撃をしてくるようになったのはつい最近のことでさ。油断もあったかもしれない……事態を甘く見ていたところがあったかもしれない。……一件目は、《ゴル・ウルフ》三体がほぼ同時に、違う地点に出現して……近いところから順に片付けていって……駆けつけた時には、もう遅かったよ……。二件目は、六体くらい連続で襲ってきて、その隙に……」

ぎゅう、と城井の手に力がこもって、指が白くなっていった。きっとその手のひらには爪が食い込んでる。自分のせい（正確には、融合している魂のせいだけど）でまったく関係のない誰かが犠牲になってしまったんだ。城井の胸中は、まだ渦中にいない俺には計り知れない。

無残に四肢を引きちぎられて死んだという、猟奇殺人の犠牲者。バラバラにされたパーツ。足りないパーツ。

それじゃ、つまり。バラバラなのは、食べやすいように引きちぎられたからか。足りないところがあるのは、食われたからか。獣に食われて、死んだのか。

獣に、食われて。

「……城井。間違ってたら悪い。でも、聞かせてくれ」
「なに？」
「城井の両親も、そうやって、殺されたのか」
「……」

城井はしらばく沈黙して、小さな声で、肯定の返事をした。
ああ、やっぱり。
間違ってたら悪い、なんて言ったけど……間違っていてほしかった。親が死んだときのことなんて、思い出さずにすむなら思い出したくないもんだろう。それも、事故や病気じゃない、猟奇殺人だなんて言われるような事件なのに。
そして、それの事件を引き起こした原因になるものが、城井の中にあるってのに……。

「……黒幕は、《ウィザード》を警戒してたんじゃないかと思うんだ。《姫》を探すにあたって、一番邪魔になるのは《ウィザード》だろうからね。《ウィザード》さえ片づけてしまえれば、あとはゆっくり《姫》を探せばいいだけ。……結局それが、《ウィザード》が起きるきっかけになっちゃったんだけどさ」

城井の声は、案外しっかりしていた。城井にとって、聞かれたくないことなんじゃないかと思ったから、その反応は少し意外だった。隣に視線を向ければ、城井には表情がなかった。それは逆に、必死で繕っているようにも見えた。

「……お前、戦う理由、《姫》を守るためだけじゃない、みたいなこと言ってたな」
「うん、言った」
「……仇討ち、ってやつか？」
「そんなんじゃないよ。……あの日、両親を殺した《ゴル・ウルフ

≫は、その場で倒しちゃってるし。まあ、黒幕を引っ張りだしてこてんぱんにしてやりたい気持ちは、たしかにあるんだけどさ」

でも、それ以上に、と城井は小さく呟いて続ける。

「私はもう、なにも奪われたくないんだ。守れないのは嫌なんだ。だから、戦おうって決めたの」

「……そっか」

奪われていない俺には、城井の気持ちはわからない。わからないけれど、自分が決めるべきことくらいは、理解した。

「……ごめんね。こんな話で。気分悪いでしょ」

「ま、よくはねーな。でも、最初に聞いたの俺だし。城井が謝る必要ねーよ」

俺はベンチから立ち上がって、城井を見下ろした。

……ちっさいな。

女なんだから、男の俺よりちっさいのは当然なんだけど。

城井の体は、そのすべてを抱え込むには、ちっさすぎるんじゃないかと思った。

「十二時まで」

「え？」

「俺も付き合う、見回り」

「はあ！？」

城井が目を丸くして、勢いでベンチから立ち上がる。

なんでそんな驚かれなきゃならないんだ。憮然とした気持ちで、城井を見返す。城井は焦ったように言い募る。

「いや、いーよ！　井澄くん、部活キツそうだしさ！」
「放課後は時間短くなったし……まあ、朝練は変わらずあるからな。だから、十二時までだ。夜通しはつき合えない。んなことしたら俺死ぬ」
「だ、だから、家で寝てれば……」
「無理言うなよ」

城井の言葉を、苦笑とともに遮る。

「そんな話聞いて、家でおとなしくしてろってほうが、無理だ」
「……」
「《ゴル・ウルフ》の話聞いて、やっぱさ、関係ないとか言ってる場合じゃねーな、って思ったんだよ。《姫》とか関係ないところで犠牲になるやつが出んのは俺も嫌だし、下手すりゃうちの部員も巻き込まれるかもしんねーだろ」
「……まあ、絶対有り得ない、とはたしかに言えないけど」

なにせ、野球部連中の頭の中は基本お気楽だ。特に真嶋とか仲町とか真嶋とか仲町とか。
今日の帰りに思った。自分の身近にでも犠牲者が出ないと、俺たちはそこに確固として存在しているはずの危険を、危険だってわかりきっているはずなのに、それでも自分にとっての危険だとは認識できない。危機感を持て、と俺が言ったところであいつらには通じないだろう。俺だって、あいつらと同じ立場なら、なんの根拠もなく「大丈夫だ」と思っていたはずだ。
みんなの危機意識の足りなさを責めるつもりはない。
ただ、俺は、誰かが欠けるのは嫌だ。チームメイトとしても、友達としても、みんなの中から誰かが欠けるような事態になるのは、絶対に嫌だ。

「奪われたくねーってんなら、俺も同じだ。俺は今ある日常が大事だから、それを壊されたくない。顔も知らない《姫》とやらのためには戦えないけど、そのためになら戦える。……お前が勝手に戦うって決めたってんなら、俺が決めるのだって勝手だ。だろ？」

俺の宣言を聞いて、城井はぽかんとした顔から、徐々に笑いをこらえるような表情へと変わっていく。おいこら、なんで笑う。

「くっ……くっ……あ、あはははは！　いやー、井澄くんて噂どおりの人だねー！」

「噂？」

「一年九組在籍野球部の井澄孝弘くんは、顔はかわいい系だけど……」

「ちょ、こらかわいいって、」

「性格はむちゃくちゃ男前だ、って」

かわいいって言うな、って、言おうとしたけど飲み込んだ。男前と言われて喜ばない男はいない、普通。……「かわいい」は余計だけどな！

城井の笑いが収まり、勝気な笑みが俺に向けられる。

「守りたいものは違っても、倒すべき相手は共通ってことだね。よし、じゃあ手を組もうか、井澄孝弘くん」

「……望むところだ」

もっとも、俺ひとりじゃ、やつらに対する知識が皆無に等しいから、城井がいてくんなきゃ困るんだけどな。そんなこと、城井だってわかってるだろう。俺にはやつらに対する知識がないが城井にはある。城井にとっては迎撃の手が足りないから一緒に戦う。利害は

立派に一致を見せた。それで充分だ。
差し出された城井の右手を握る。

「よろしく、相棒」
「頼むぜ、相棒」

お互いににやりと笑いながら、ふと、城井も結構性格が男前なんじゃないかと、頭の片隅で考えた。

「ところでさ」
「ん？」
「《姫》って誰なんだ？」
「それはー……秘密ってことで！」
「はあ！？」
「だって、《姫》を守るつもりはないんなら知ってる必要ないじゃない。それより、井澄くんにはとりあえず、《あっち》の情報叩き込んであげるからね！」

前言撤回。こいつはかなり性格悪ぃ！

世界が変わる音

少女は走っていた。

吐息が白く存在を主張する。冷えた空気が喉に張り付き、刺激し、呼吸の邪魔をする。

肺が痛い。そう思っても、少女は足を止めなかった。

雪が降っていた。初雪、というやつだった。

少女は、雪が好きだった。少女はすでに中学二年生で、もう小学生のようにはしゃいで回ることはないし、吹雪なんて論外だが、しんしんと、ゆるやかに舞い踊るように空から降りてくる、そういう光景が好きだった。ちらちらと雪が舞う日には、必ず散歩に出かけていた。

少女の母も、少女と同じく雪が好きで、雪を理由に少女が散歩に出るときは、夜はもちろん日中であっても同行してきた。

今日は週末ということもあり、少女の父も、「最近運動不足だから」と言ってついてきていた。

その母と父と姿は、今はない。

一番に異変に気が付いたのは、父だった。

ひらひら踊る白結晶に意識を向けていた少女や母を見守るように二人の後ろをゆっくり歩いていた父が、ふいに足を止めて振り返った。それから五秒ほどして、父が立ち止っていることに気付いた母が振り返り、少女は母と一緒に数歩分引き返した。

どうしたの？　母が尋ねた。

音が聞こえるんだけど……なんの音だろうな。父が答えた。

少女も母も、父の疑問に首をかしげた。そもそも二人には、父の言う音がまったく聞こえていなかった。

その応酬の直後だった。

今度は、少女にもわかるほどの音が低く響いた。空気を振動させて伝わってきた……というより、地面を這ってきたような音だった。

その音が、ほぼ一定の間隔で響いてくる。足元に意識を向けると、微弱ながら震動を感じられた。

なんだ、あれは。

父が力のない声で呟いた。

父の視線の先を少女が追いかけると、そこには、黒い塊がぽつりと存在していた。

それがなにかわからず、三人でそれをじっと観察している間に、音と連動するようにそれが大きく……いや、近付いてきているのがわかった。徐々にその姿がはっきりと視認できるようになってきた。炎のようにちりちりと揺らめく輪郭。足が二本、腕が二本。そして、白く、ぎらぎらと光る、大きな歯。

本能による危険信号が脳裡に瞬いた。逃げなければ、と思考するより先に、身をひるがえした父と母によって体を押された。

逃げろ、と言ったのはどっちだったか。

父と母の手に不思議な力でも宿っていたかのように、考える間もなく少女の体は前へと突き進んだ。

ただ走った。そのために必要なもの以外の感覚をすべて遮断した。

しかし、疲労ばかりはどうしようもなかった。もともと、少女はそれほど持久力があるほうでもなかった。だんだんと足が上がりきらなくなり、雪で地面が濡れていたこともあり、靴底が滑り足がもつれるように転倒した。

手のひらと膝から沁みいるような痛覚が脳に届き、息苦しさから咳き込むように呼吸を繰り返し、自覚した疲労からすぐさま立ち上がることもできなかった。

じりじりとした痛みが、少女の意識を現実に引き戻す。先ほどまではなかった涙が目じりに浮かぶ。

父と母のことが浮かんだ。自分が走ってきた方向を振り返るが、二人の影すら見つけられない。

少女は俯き、ただ深く荒く呼吸を繰り返した。

二人の声に導かれるようにがむしゃらに走ってきたが、二人はど

うなっただろう。どうしてここにいないのだろう。
疑問の片隅で、逃げろ、逃げろと警鐘が鳴り響く。しかし、一度座り込んでしまった体を再び引き上げるだけの気力と体力が、少女には残っていなかった。
じっとして、ぼんやりと、心の声で両親を呼び続けた。
そうしているうちに、音と震動が再び少女に迫り、やがてそれがぴたりとやんだ。立ちあがるほど回復できていない少女は、肩越しに背後を振り返った。
数メートル先に、その姿があった。
炎のようにちりちりと揺らめく輪郭。父の倍ほどはありそうな身の丈。ぴんとたった犬のような耳。漆黒に輝く瞳。全身を覆う毛は黒一色。
闇そのもののような獣が、そこに立ち、少女が自身を視認したことを理解したかのように、口を裂き開いて鋭い牙を覗かせた。獣の表情などわかるはずもないのに、少女にはそれが、嗜虐性溢れる笑みのように思えた。
がんがんと頭の中で警鐘がわめき散らすが、それを上回るような得体の知れない恐怖を眼前にした少女は、もう動くことも目をそらすことも出来ず、ただ体を小刻みに震わせて見たことのない生き物を見つめた。
獣が左腕を振り子のように振った。鋭い爪を持ったその手からなにかが放たれ、少女の真横にどしゃりと音を立てて落ちる。
強張った首が、ぎこちなく動く。なんだろう、と思ったわけではない。今の少女に、思考を行うような精神的余裕は存在しない。獣が、まるで「見ろ」と言わんばかりに放り投げたそれに、誘われるように体が勝手に動いていた。
右の肩から腹部にかけてをごっそり食いちぎられたように失い、左半身がどす黒い赤色に染め上げられている男。
腹部に大きな孔を穿たれ、そこを中心にして、衣服がどす黒い染みを作り始めている、女。

それは、父と母だ。
苦痛のための歪みか、人相はいくから変わっているが、それは間違いなく、間違うはずもなく、少女の父と母だった。
それを認識した途端、焦点がぶれた。体が芯から震え、奥歯が何度となくぶつかり合って耳触りの悪い音を立てる。吐息のような喘ぎが断続的にこぼれだす。視界が歪む。
ゆらり、ゆらり、滲むような世界の中。
生気をそぎ落とされた父と母の顔に、見知らぬはずの少年と少女の姿が重なった。

「あ、あ、ああああああぁぁぁぁあぁあぁあぁあああぁぁああぁぁぁぁああぁあぁ！！」

それは悲鳴であり、咆哮だった。
全身の熱が右手に集中していく。少女は視点を闇の獣に固定した。一瞬の後、鋭利な先端を持った氷の塊が獣に襲いかかり、十以上あるそれが獣を一切の容赦なしに貫いた。ハリネズミのように棘だらけになってしまった巨体は、頭部から後方へと体を傾げ、大きな音を立てて地面へと倒れ伏した。
体から力が抜け、少女もまた、冷えた地面に横たわった。視線を動かし、自分の右手に握られているものを見る。見覚えがないはずのもの。けれど手に馴染む感触。
ブラックアウトしていく中で、少女は一つだけ理解した。
それは、当たり前にあった日常が、もう戻ってはこないということ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2236x/

姫とナイトとウィザードと　～ナイトの章～

2012年1月1日00時52分発行